俳諧手合 下

へ 9
4517
2

へ9
4517
2

鷹狩　新樹　藥玉　旅宿　納會　雪
當坐卅々追加　上巻　汐干　夕雲
當坐卅々　仝　仝
藤袴　鹿笛　囲碁　寄草花意
空炷物　月前虫　寒梅　伏屋
納會當坐　冬鳥
梅薫袖　野露　妬恋　戯画
松上藤　秋釋教　絪代　別意
子日遊　暮秋　秋菓　糸遊
蹴鞠　園草花　幼恋　試筆
猫恋　七夕　春山　寄夢祝

<2016-212>

源氏小鑑俳諧歌合巻之五

四方歌垣老師撰

みゆきの巻　鷹狩

裏徴
[illegible]　高安

[illegible]　芳成

[illegible]　福養

[illegible]　萬象

目妙加花二
[illegible]　名古屋　弘器

目妙
[illegible]　満来

[illegible]　哥和成

[illegible]　総丸

[illegible]　節躬

[illegible]人の香より先と[illegible] 恥女

かゝれ[illegible]の[illegible] 逢女

き[illegible]の[illegible]八[illegible] 蜨通

[illegible]の[illegible]も[illegible]の[illegible] 入船

ひ[illegible]二[illegible]の[illegible] 仝

[illegible]一[illegible] 義那丸

子[illegible]八[illegible]の[illegible]の[illegible] 常江戸寄 元有

葉の名そ

藤袴　同撰

裏徴加花二

藤[illegible]れバ又[illegible]の羽織も[illegible] 雄頼

[illegible]男[illegible]れ[illegible] 雨守

裏徴

[illegible]の[illegible]藤袴[illegible] 蜨通

目妙加花一

[illegible]人の[illegible]への藤袴[illegible]の[illegible] 高安

[illegible]の[illegible] 孫さ女

目妙

藤[illegible]の秋 縂丸

[illegible]の[illegible] 苔成

[illegible]藤袴[illegible] 交頼

かの國の[illegible]藤袴[illegible] 枝成

[illegible]も[illegible] 萬象

[illegible]村の[illegible]藤袴[illegible]のひ[illegible] 置安

[illegible]の名そ

空炷物　同撰

裏徴加花二

[illegible]や[illegible]の便[illegible] 一夫

目妙加花一

[illegible]姉の[illegible]の[illegible] 福養

紫もこそ雅にかくし恋すらん含みて時よき梅ぞえ　永雄

梅の枝のあそ

梅薫袖　同撰

東微加花二
此頃の人をハ袖のうつり香見も地ぶかた出香の梅が香　内匠

裏微
をれかゞ隠すとりのたてゝも出かの身がちる袖の梅が香　鶯鶯 大房

同じくは風も吹さしくれ位とて枝にうつる袖の梅が香　哥多丸

梅世にふる春の袖手八あそびの庭にも袖で浮めるぞかり　将雄

にほひこそとまらずとも手かゝる袖ハおれぬ風の梅が香　美耶丸

梅が香をかくれんぼりかへり香ぞのうゑる妹が手袖　常土浦 万麿

咲梅は色をとめ袖の女達に被きし匂ひ衣の　仝

目妙加花一
紅あひし袖を梅える府りえハ召もさまりも恋ふる人あれや　相三浦 豆成

目妙
岩に梅をおりたる移か梅の匂ひ人の袖にとまれて　仝磯辺 年久

梅それの手折も今かやうり見ん人形袖にうつる梅が香　鶯鶯 大房

うつりにほふ手折り行れて振向けば袖引留る庭の梅が香　清住

風の手に運ぶとされとらか袖に香もり持る此頃の梅が香　哥多丸

咲ぬれぬ匂ひにも衣せしが色は袖につけて春かすり　世冨

花くれのかへしが私もの…袖のかさる七つ梅の色　常江戸崎 元有

杉田かく
梅のまゞ移ろどそ南…　真顔

藤のうつる松の色

松上藤　亀長堂撰

鳴立沢加楓二
松が枝に春と…まつはる藤の蓮纏　高安

にほきもの…松よりかゝる…紫の藤　清住

紫に…のかゝりと藤花の行もあ持し庭の松が枝　奇和成

うつゝきの…松を…　永雄

鴨立沢

ゆく春を松にのぼりて見送らハ春も常磐とちぎりかわさん　総丸

生れ出て子の日に引きし小松原松と春とを酒のさかなに　哲成

雛枝の鶯なの松にちらしきや春の女房　為成

朱雀葉にかゝる松のみどりもおもひそめて藤の紫　哥多丸

いとけなき松のみどりや女房の紅葉をまぜる春の女房　盛岡 福従

春の雪積くにまかりし松の枝えくむらさきの雲　愛滝

雛松の藤に紫のさく春の露しげくや結ぶしめ縄　縫女

松が枝に咲くかゝる藤の色をなごりに春の名残の雲　仝 泉花

春の日も松の藤枝ともろくにのびあがりつゝ咲く藤の色　入舟

若松の枝わかれと春さきハ風のまにまに春の色ある　入舟

三笠山松の藤なみ紫の色よくたてゝ春の名残さ　楽雅

川島 菴住

波耶細

柳樽へまいし春の雲雀をおもとの袖ていとめされけれ　順風亭 入船

裏繁加花三

子の日の宴の小松の雲の中にうちえぬ姫小松ゆ席の雲柱　秋衣菴 祐さ女

春ちる猫の訴しれハ秋のうち小出分のほそし麓妻かへし　盛岡 秋田舎 福従

浦通客屋

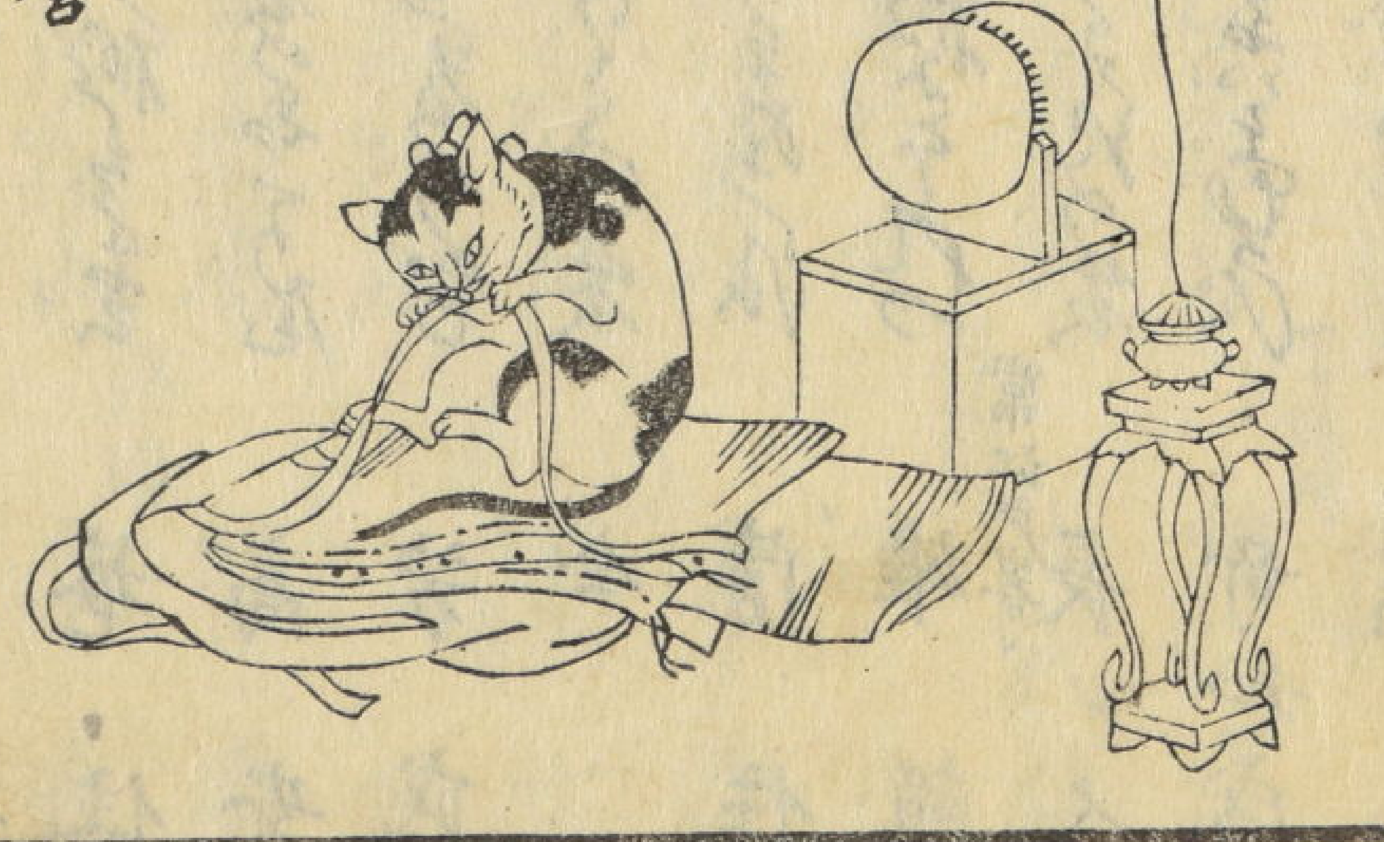
小屋のあくりなの宮姫が追へと猫路を露しくさくる玄猫　秋帆堂 哥和成

外猫とく遠くまり場のうちさ汗ふも狸ぬ子の袖

鴨立沢加机三

出ゆるよりやよひの頃にきのふと尽きぬ月の猫鞠　鹿寿菴 蝠宮

見るく蹴上る猫乃まり待祇業やもろのあけかの　秋実亭 就彦



春もやゝ日数ふるとまつと見ハいろもたびさく藤の花
満来

山松に流れぬ波の音して藤の浪の音しや風のふく空
盛岡 底根

槙立山加楓一
春霞と雲きらふもかゝる哉松ハ藤棚藤棚に雲
菴住

山より出る滝てし松が枝にかゝりしも藤の春の尾
高安

たけ高き松の二葉にみとりかる春霞かけて咲藤の色
芳戉

むらさきの雲の袖や山松にかゝるならひもかけて咲藤
仝

山姫の雲の衣の春よりも手に入し松の藤浪
清住

松が枝をかりに結へてしめしより地をも藤の根にとられつ
雄頼

羽衣の帽子とミえつ姫松のいつも紫の藤
江戸常寄 長人

なかもとも風に靡る藤浪もつまを松のきみハなもなび
哥和戌

松が枝にちよを契りも千とせまで春にさかる藤をかけて見
総丸

笑りきる雲の袖に藤の色ちる花かざりや春の青山
下斗塚崎 仝

鶯枝の鶴ゑんの松に花かけ藤の枝にちかの縁ハ
稲守

千尋りの松にも藤のむらさきの波のかゝるとやえむ
千代住

つるくと見る日の出ハ千代の松雲のかゝるむらさきの藤
相思名 方之

藤浪ハ帰りの松にかゝり人来るとあとのきえかゝ見て咲
長房

松が枝のみとりよりも若紫の藤の色まさる
篭女

弥生つ卯月きぬると松が枝にかけて咲藤の色の前
永女

玉の浦浦の松を知らぬ丸の網にかゝる藤
蝠麿

この三ハ銭浪藤浪の花さ見えて木に松山
盛岡 糸長

百歳の齢を延へて千代の松に紫の松が枝の花
愛滝

松が枝にうつる夕日のかげをまた下にし八重紫の藤の紫
菊丸

常ふみどりをそむる松ならで色もかはりぬ千代とまどはず　大枝

松山のすゑの契りし梢まで二葉ちとせる色の白浪　春子

松風ハ浜の音せて聞ゆなり千代よばふ鶴が声の宮居　椿丁

松が枝の中よりかけるむかしの根ふかき色の返る色のときはさ　常江戸寄 置安

住よしの松の木の間のかくれがや拙かしと見る色の声　元有

生まるゝ松も色ふかき岩の赤くむらしく折てけふ哉　上総勝浦 追風

名にたかき尾上の松を高砂の浪ちる鶴のかけん色ふかの音　相磯辺 人真似

木の間より千代をちぎりあはせて春の富士山の千歳ふる鶴の松が枝　上毛小俣 竹雄

松が枝に霞の幕をはりつゞる春さへもかはらぬ色の宿　盛岡 底根

松風に岩ね鶴の声のれハゆかり色ふかき春の色の浪　仝 鄙田

ますかゞみてるもの色も千代かけてとしくむかへる松がえの緑　仝 觴

子日遊

ここよりは王のもと　同撰

鴫立沢
けふ来る引く子日の小松引かけ袂ハ子の日とて松が枝の春　永女

引袂の春のけしき見渡せば小松ひく手の緑の糸に君をこそ祝ひ　総丸

百敷の大宮人ハ春はりの千代に子日の小松引らし　篭女

うち群れて千代のためしを引き初めて君が家の千歳に松を引く野辺　節躬

うぐひすの初音の春ハ千年の君の松が枝にかけて千代を祝ふ人　相磯辺 年久

子の日して千代を祝ひの岩松も引く手も千歳に祝ふ人　盛岡 糸長

長生の枝もちて千代のためし子日の根松のとも千歳とを引　上総岩和田 濱住

子日せし野の姫松に契りまでも男も祝ひ子の日を祝ひしの引　常江戸寄 飯成

槙立山加楓一
姫小松引て遊れて松が日ハ祝のひとかたの千歳の宿　波々枝

十寿の千代や契りの子日の松びとと千代の小松を引あそぶなり　交頼

源氏五六

若みどり松の実とは子日してひく手も上身とや張りけり　川南

千代かけて子日の小松八千年あまり千年ぞ引かるる主人　清住

ちよ経たき小松を引て主人ハいつもかはらぬ結びかな　就彦

子の日なる結びのことに小松より花と契りや主人幸おり　常江戸崎 長人

七草つむ畠の土氏もあるまじ引も春れ　総丸

こゝろざしそか老の波七引松にも代々の根ざしをなが人の春　萍

うも飛て春の子の日に小松川千代の千歳に若菜つむ　盛岡 福従

御よろこびる根ざしもこのれ子日し七ヶ月あまりぞ見え小松ハ　川南

引とそにまけぬ初子なめでたさハ深し世の子の日の松　上総刈谷 直人

白丁にるるそ千代なる初松あれもうち若をまどふさの　仝岩和田 濱住

上人のちよる小松にちりとる八子の日に出し世々のよろこび　仝

小松引て松ぞ子日の根ざしも経く世をのたる北一日　雨守

小松引むかしよりも猶よろしく千よをたのしと気候ぞつく　美那丸

初子の日か茂のあとより此きべき出むそのまの小松引ぞ世　常江戸崎 飯成

いとも永き春の初子とは代だが若緑に小松引らむ　上毛伎崎 比楽

ここに下の巻

蹴鞠　同　撰

鴫立沢加枕二

青柳の露をひしく柳本のあり流しやまの花の鞠　奇多丸

鴫立沢

青柳や春の流しに露をひかれ花ぞる春の鞠かな　芳成

名をちなるく蹴とげて皆そるまりハ雲井の結びかな　川南

枝を植し柳に月のかけもはし蹴りも見し花る庭の鞠　名古屋 弘器

四家あハ初ひびかくかぬ花さ結びの鞠の春かな　萍

かりゑハほし出ふきみるせとなびかくこゆるみなる井の鞠　夜宴

揚花のあやめ雲の上にあげ鞠もうつる人の投びかけかな　　蝠磨

まさるく雲井のめく揚鞠にまさるも業の家　　上総岩和田　濱住

ありもむ四季かゝりに今更見鞠八雲なの投びかけ

松をめし鼓の音やぞんくとお舞の名をめるまり哉　　真菊

鞠の庭植木も四本かゝり老人も四季にそてゆかん　　満来

ほん庭かゝげおよりも桜木の鞠角同しつく鞠の絵り　　萬象

おも丸く蹴鞠の庭に揃木の家の流しの名あそとしも　　楽雅

庭の井戸につれて庭もの花さかげ鞠や雲の上人　　相三浦　豆成

蹴鞠の数は八千代と家人の絵あげらさん花ぞまれ　　満来

花もるく今八重井にあげ鞠の枝かしこそ末代家の流八　　福養

わかに伝ふ身の家む蹴鞠接人の花ある桜木の鞠　　絲さ女

　　名古屋　弘器

大空の鞠の皆下に花れたる玉と面白く舞ひむ一刻　　哥和成

柳桜井にかけたる揚鞠八蹴出る今も桜の月　　総丸

見をしも思ふしい八千代の鞠かゝりの雲ゐも桜の鞠　　川南

おもる井へ影せうつせる庭のぞそれたる鞠の桜の名ぞ　　長房

亭主人も投び業とみる庭かゝりのかゝる家の揚鞠　　哥多丸

乖しさはそのうもとにありくと雅が鞠の丸さまとも　　繁留

地下の名もゆるし桜の八葉のうりかも同じ鞠ならむ　　萍

桜木の名のん流しれまる柳の家も絵に揃ふ数あり　　一夫

桜木の名にも思ふしの家にかゝれる鞠や雲の上月　　菴女

わか家の庭に蹴あげる花る井も鞠も雲ゐの投びかけ　　盛岡　蝠磨

家る井や庭に松も似る鞠場のかゝり桜木にあけぼの鴨哉　　福従

まり場にをも見物もかゝりけり鞠遊しさ秋の暮一　枝成
梅の花の後もはきれぬつまをつけて蹴鞠につゝる紫　泉花
蹴まりのして鞠あげられてころげて……　蜷通
……八千かれどもところのあそび人の形ぶまり　満来
梅のえにとも……着一のまりをとる千の紗　古松

猫恋　同撰

鴫立沢加楓二
座敷猫まぶ形のふの傍のゝを……形の妻恋　縫女
同猫の耳をこまりて妻恋のことを……人にせつ　世冨
鴫立沢
経……ものいとふ……猫の貝を深にて　芳成
……猫にまかれぬと……のひさしさ　総さ女
貝……ごの……日……阿猫　雄頼

……猫で……　持雄
……猫で……　春子
……猫の恋の……　常江戸嵜 楽雅
人の目も……猫　元有
槙立山加楓一
……　恥女
三味線……猫も……　常江戸嵜 餃成
……猫ハ……　哥多丸
……猫も……　総丸
……男猫……　莒成
……猫の……　為成
阿猫も……　長房

ぬばたまのやミに来る烏猫かのこゑにハおびえ[illegible]　万都子

兄弟と小梅をも[illegible]三毛猫ハ[illegible]へ[illegible]　永女

[illegible]て若葉がくれの[illegible]とも[illegible]猫　下守

妻こひに[illegible]ハ[illegible]の[illegible]人[illegible]　節影

引窓のひまも[illegible]て[illegible]の烏猫の[illegible]　万都子

[illegible]をかき[illegible]猫の三毛[illegible]　内匠

[illegible]猫の妻こひ　蝠磨

[illegible]も三毛[illegible]猫ハ[illegible]の[illegible]妻の[illegible]　盛岡 福従

[illegible]の[illegible]猫の妻恋　上総岩和田 登度女

烏猫[illegible]人に[illegible]見で[illegible]妻こひ　縫女

[illegible]根の[illegible]の妻を[illegible]猫　真菊

家の猫の[illegible]北窓を[illegible]妻三毛猫　常江戸寄 清女

三毛の[illegible]烏猫　仝 飯成

[illegible]猫の[illegible]の妻や[illegible]ん　哥和成

三毛猫の[illegible]への[illegible]　総丸

[illegible]猫と三毛[illegible]　乃婦女

[illegible]鞠の[illegible]三毛猫　万都子

[illegible]の[illegible]より[illegible]猫　長房

[illegible]のよるの[illegible]や三毛猫の[illegible]　万都子

[illegible]の[illegible]三毛猫の[illegible]　枝成

[illegible]の[illegible]妻こひの猫　菊丸

[illegible]三毛猫の[illegible]の秋　交春

浦邊苫屋

さ月のうゝゝりにゆきさらぬ浪の
松も一しほまさりてるを

上総岩和田 秋実庵 登度女

鴫立沢加抓三

舟ゝさすみ日の松に老もえに
部の緑とも出まさく抄へる

相恩名 山田 方之

こゝろきれ
浜の松ふし
咲ぬれと
やさし
ぬくきぬ
きの友
浪

常江戸崎 蔵器園 長人

松えにかゝる
老の初つく
くゝる家も
くゝひけそえる

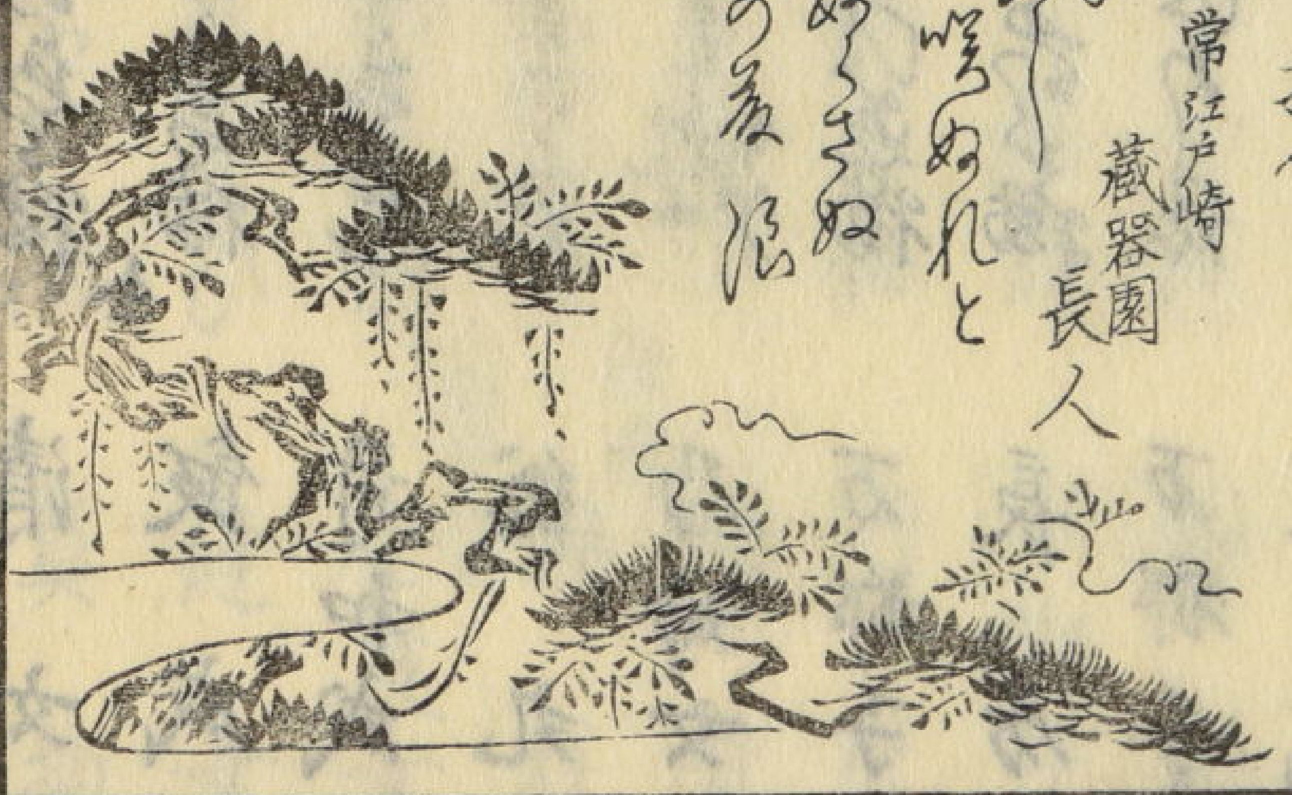
秋狂亭 支頼

きのふの業
くふる
子のりの松
くしく
出くるしし
まの
あ人

湖面堂 川南

江にの江の
松の友浪
よるさへや
楽にも
芳れ
色添

秋鷹亭 総丸



妻恋ふに猿もせぬ松風にゆかしと仰がれるとぞ啼く猫

常江戸崎 萬象

花の秋花も毛衣に似猫のつまこひ老も又気まれなり

上毛後閑 元有

鶏の声急ぎねまとの鳥猫人間の笑を織りまぜる

山風

啼く秋もいそぐ出かける猫達も出で来るところし寝

常土浦 万麿

○

こと汁をいつかなる紙鹿狩猫がふりそふ猫の仇し名

物築

當坐 扇面画賛合 同撰

十二点

芋に枝豆のつく

枝豆のさやもむきとる月の光のきぬかつき月あかりなる

雅楽雄

きぐのつく

蛙のむつしみかへし宿でふたつよく入れてまどひ

哥多丸

あさがほのつく

首綱のとりし出眠るひよりぞ翁ひとりし朝顔の花

上総岩和田 登度女

大山まゐりのつく

かけし御祓も手にねがひまた峯迄岩へ向ふ宿より

支春

女の傘さしたつく

かんざしも山形とおもふる女の傘さし日傘の図ぞゆかしき

入舟

ふつりと紙にさへみしもこぼれ桜狂ひちらして見ひちらしそ　ゐさしにこぼれ花のくさ　一夫

○鳥あへるつゐさに
此の世法をとりかけて[illegible]と仏にも昔の跡むすぶれき　物築

四月分追加　汐干　夕雲

目妙
あくとうに浪も取り汐干潟妹は[illegible]貝も[illegible]　上総刈谷　直人

花も汐に[illegible]の浪の[illegible]はまそ[illegible]貝を[illegible]　仝勝浦　追風

旗立山加楓一
潮さし[illegible]の[illegible]より月の嵐の雲[illegible]　直人

源氏小鑑俳諧哥合巻之五終

源氏小鑑俳諧歌合巻之六

四方歌垣老師撰

柏木の巻　新樹

褒微加花二
[illegible]かり[illegible]ゆる[illegible]を[illegible]を刈ての庭　繁苗

[illegible]とくも[illegible]あとを[illegible]の若桜　武大沢　歌種

褒微
若桜をとむる[illegible]の[illegible]もるりの小[illegible]　萍

吟[illegible]の[illegible]けく[illegible]れど[illegible]　節躬

[illegible]の[illegible]柏木[illegible]　常江戸崎　元有

[illegible]の[illegible]枝の[illegible]　伊勢　道茂

目妙加花一
[illegible]の[illegible]花[illegible]　江戸崎　長人

あの[illegible]の[illegible]今[illegible]若桜　常土浦　万麿

目妙
[illegible]　相磯辺　年久

よの山の里ハきゝくるゝもあはれと人のいひけん　古松

初鹿のこゑ聞そめしより幾夜の八千声しけり　川南

声にとく杉田の梅も花ちりてまちわびしありとみえぬ野辺　滝津

紫の露もさわぐ声をもとめ帰り宿あらしく声の浦波なり　就彦

花の色にゝせし風のまゝ日も重さると答ふる夏山　歌多丸

さつきの絶ゆく浜辺を老り枝に月日の行も声をき山里　支春

奥山の鹿と知らせてさそふなれ人の笛も音せぬ瀧津瀬　伊勢　道茂

横笛のうた

鹿笛　同　撰

裏徴
ことさむみ鹿に比して細く吹くも秋されバいと細く吹き鳴らす鹿笛　一夫

目妙
笛の声をつまそふかとおもひてもおとづれのべの萩　節躬

笛の音によるさを萩の声をあはれきんかのまさるみたつの山　泉花

笹のあれハとりの山に露をしく引入るゝみゝ萩の葉　万都子

妻こふる萩の露をさらす男鹿がまちける宿の笛かな　竹女

みだれさよ揉まくきく秋野の花咲乎につゆも乱風の萩笹　支春

詠むしのうた

月前虫　同　撰

裏徴加花二
きりぎりす月に鳴もむし啼月にあらく影や人かへん　苔成

宵なるハ音にてよるべき月の秋ハ思ひ見んとされバ虫の影　孫さ女

わきこの秋は月の影に萩のなきの中をもて織　内匠

裏徴
月に虫の秋なるひともかやつり草を這ひ出て秋　苔成

照月にかゝる虫の声むさゝもの中に松虫乃声　総丸

山際の月にはうつる照月に萩の露まてあるき　入船

させくるとたのむしきあきさへやつる天の空る月のかげ　上総刈谷　直人

目抄加花一
つゆくさにかくる錦むしの女まつれ千草へ照るこの月かげ　友頼

新秋の月にこぼれて松より払ひせし庭に鳴く虫の声　雄頼

錦むしの音もさえ／＼と虫さへ雲にさえ渡りくる月の秋かぜ　哲成

目抄
七夕のあとてらせる月影にむしの音さへかはりくと見ゆ　相磯辺 年久

照月に秋なべ宮もろん錦のつま虫針めども照らくるとも鳴く　全高森 挑睟

てる月のかげなる錦も勇むらん響むかく武蔵のゝ秋　清樹

秋なれど浅茅が原に月のかげさしながらに虫の音ぞ乱れし　為成

照月の小つゝみうろさしの田毎に移る雲井の声　磯辺 人真似

宿りなく尾花の露のきりぎりす月の影やこゝろさすらん　内匠

秋の夜の庭を照らす秋にきりぎりす鳴く声ぞ月のさやけき　長房

月の橋をうけてはたる轡が野辺の錦はれゆく出し車とゞまぎ　節躬

曇りなき月の光明に照添の其さかし出しける世の居家　滝津

月かげにとりも入らぬくさの戸につゞれさせよと鳴虫もあり　千代住

秋の夜は月ともろ共や宿の戸をさゝせとはこそなくきり〲す　芳成

月影にうつるむしの鳴声の音はちがふものぞかなしかりけれ　常江戸崎 長人

晴れど戸はさしかねつ月ゆゑに猶ふる露の虫の声　於兎門

月を見てかこち顔なる人もなくて宿に雪むしろ　総丸

月の出に北風の露の浪はて八幡のあたりて松虫の声　仝

久方の光雲なき月の影迄へ鈴や虫の声ぐく虫の音　真菊

久方の月の影々ハ虫の声のあはれ哀れに鳴きりぐす　仝

照月に破れし衣のつゞれさせとて蓑なく　世冨

更む月の光にさし枕にきりぐ鳴蟋蟀の声きり〲す　大枝

曇りなき月の錦に向ひより鳴て今ぞ織むしの声　雄頼

月にこそたれをも笑はれ虫の音かこの鳴くらん　枝成

月影の至らぬ草の花の色にとまるも露のあはれさ　楽雅

たぐひなき月影にも虫の音の声　盛岡 底根

かはらぬ虫の月の影ふかく鳴ける虫の声　仝 不死躬

夕きりの露

野霧　同撰

裏徴加花二
武蔵野の天のさかりハ虫の声さゝなくより鳴けつらん　枝成

裏徴
大和路にありと見しかげろふもその中も見えぬ野霧　上総東金 真宵

むさしの八尾花が浪に月の影も虫の声の霧の海　雄頼

目数加花二
月なき風にも見えぬ霧のうちにかくれ秋の野辺　一夫

霧の海に立つその根も隠れてハ虫の声も知れぬむさしの　常土浦 万麿

目妙知花一
此の原は風の音さへ隠しすがたをつくる秋の夕霧　盛岡 福従

月の出もかくれて似たる月の夜ぐさの今宵こそ　文春

刈萱の乱れてまさる萩薄にきりのかけし世路の野風　仝

目妙
あさ夜の霧吹く月にかくれんが竜や蔵の袖もなびかん　上総東金 真宵

芙蓉にもかく色も見し八重もかくの朝なく世路の夕霧　庵住

むらしまを帯けなけば渡るの秋霧の海に入らん　内匠

まさに夕霧は世まく迷ふ旅人　琴人

ころがる世路の朝霧ほのぼのと花の色さへ深きの姿もかくれて　恥女

萩薄もころがるの花も露にまさる夕霧　趯丸

名月の入だささへ霧ありて霧にむさしの原　皆丸

たむけくる霧の海に入月の霧さへ見えぬむさしの　哥多丸

吹きわたる風をよぎりし露草や秋は秋霧の深きむさしの　仝

みのわたのむくと広きの穂さへ深くや立川の海に　真菊

まきのぼる秋の野山をたちこめし霧に隠れし袖も　仝

世わたりの夕霧　酒徳

高麗は霧のわたる　真顔

○

このりの書
秋　釋教　穐長堂撰

鴫立沢知楓二
浪の花の袖　相三浦 豆成

川　清住

極楽の　節躬

川せぐき深き御手の一葉秋の夕浪　芳成

鴫立沢
深草のきりかかる　相高森 桃粋

萩すゝき色のさかりにねまるともおく露をも払ふかきかな　雄頼

魂祀へ秋の七くさ手向て八千代の稲の初穂さゝげん　盛岡 福従

笠の緒をむすぶ賤の小山田の稲のかゝしも秋の[illegible]　泉花

つゝ稗くみ露べる葉の色のみのりたるかな　歌浪成

かゝるとも稲もその穂くらへし深の秋かな　真菊

米の実のあるを淀にも秋のかゝしの穂は[illegible]　楽雅

槙立山加祖一
[illegible]　萍

初もみぢの[illegible]秋の[illegible]　菴住

[illegible]秋も[illegible]ときく　孫さ女

川柱[illegible]秋の[illegible]　満来

[illegible]の[illegible]　節影

魂むかふ影のまひさし[illegible]　仝

[illegible]花[illegible]川柱[illegible]　苔成

かけ[illegible]秋の萩[illegible]　滝津

僧の[illegible]法せしきりおん[illegible]汗の[illegible]　ミや子

芦根[illegible]秋の[illegible]川[illegible]　真菊

[illegible]の肉[illegible]須[illegible]　大技

[illegible]魂祭[illegible]　照道

暮秋　同撰

鴫立沢加祖二
[illegible]　孫ざ女

[illegible]秋の[illegible]　内近

[illegible]秋の[illegible]　雄頼

神垣やかゝやくとみえたは菊の秋の日あしのかけも延して　総丸

秋の日もなかつきとはさゝめきはさとたなはたへの花縫ふ　真菊

渡さぬくさやめる人の袖のうへ家ハちよはまたしろ秋　武大沢　歌種

鴫立沢

月影にさえる楼も都まて袖の色つして秋ハ驚かれ　相磯辺　年久

園にのこる風のたまえ出てこひの故の露もかく秋なき　為成

名残をしと見る花の露の袖にも拂ひ秋ハ風遠　満来

しらぬ秋の暮路とおもふ日もあらく末の松山　長房

嵐さのかしらの露にをらそをたつ秋を惜む山路　節躬

夜の浦にこかれし月のみも出ぬ秋の暁の漢かなん　琴人

かけ路や人のゆきの音細く千とせの秋の菊の花　上総岩和田　登度女

棒弓引きも絶せぬ菊のみえつしろ千とせて菊の秋　就彦

くれてゆく秋のなごりをおしみてん萩くずにかくる露の諸折　泉花

菊さくやゆく秋をばまだ見ぬ花にをりけるぞ咲る撫子　雨守

草花をこゝろみたる秋にありよる虎丸が庭をまたうけるく　島守

さびしさは見ぬ名残ありしく行秋の名残はけふつくる影をも　哥多丸

昨日ある後に折し袖をこゝに残りけりして秋はとゞめし　大枝

ゆく秋の後を告つゝ空の花かくすとまゝる雲のみきど　蝠麿

秋の日はつくしをを吹ねる野辺のまゝとの時雨初りん　哥多丸

とまれとも吹く綿代に時雨ゆく後の名や秋の空をまみ　縫女

夕月のながくゆくあやなきの袖にかゝる秋の別を　盛岡 鄙田

木の葉ちる山は錦にかゝる後にてぞ知る秋の名残　仝 觴

まだ見ぬさき梢の下葉も残りなき梢の秋はいかであるべき　楽雅

槙立山加楓一

日ごと染るもろの山は紅葉せで秋くるゝとは思ざらん　古松

紅葉ばにみの色添りし見えつゝのたの去れる葉は秋の名残さ　相愛甲 酒盛

さびしさに三九日茄子の枯れぎき簾の吹く時雨哉　仝高森 桃畔

ゆく秋を招けとなむ穂露の名残よいそぐかむり行も　萍

をしまれんと思ふは鳥の声をきゝて秋の名残を志るよしもがな　雄頼

あかり見柿さへ落てさびしき蝸の名残は実と遠さりけり　川南

去の田もかゝるに実ときくの哀あはれ猶ある野の菊のこと　相磯辺 人真似

人住まぬ菊の秋の田面をむしつゝ見る尾花の露さ　赤志

をしめども止まらぬ秋のなごりとは菊さく今日と屋根に残らく　琴人

秋の去や菊をも惜しむ人のまそ萩が袖もいそで露ぞ置き　芝崎 恥女

限りくと日かし経くなる秋をも惜しむそべきうつろ菊の花　板書

百草もしげりし世辺に秋くれて寄るも本の草も渡りそめけり　縫女

むさし野は秋の紫苑と訪ひ来く草の葉も見る露の玉ぐし　於兎門

まだ見ぬ人をまつ秋のきぬるの八秋の雨どりの浪ちりなん　上総岩和田　蚊也

ととむる草も露庭にまでもりおきし手の秋もくれぬと思へハ　仝　舟丸

世をすてし草木も志られぬ露を拂ひ浪に乞まとふ秋　仝　登度女

日も近へ稲も穂ながかねそめて秋と野の草寸　真菊

新くへ落き葉屋にかくれ行て秋のあはれを拾ふて見る　酒徳

行秋の後にちぎる露もなき草もうつろひまで見え　常土浦　万麿

幻の巻

園草花　同撰

鴫立沢加楓二

如月もまだ見ぬ垣根も雪に這ひ出て若菜の芽　清往

うつりゆくと見る園の花ともに秋の千草　菴往

百草も秋の園生にそよぐ秋と八しらぬ露し　照道

鴫立沢

お鶏とさとひとつる蘭秀たてうけてぞ風も白人る　清樹

草の上にかげろふひとへ月の秋はさけし露の花　友頼

草花にかかる露露にきはてけもちと六まで園　滝津

垣の内にのまぞと思ふあかまつ月につくる園の鶏頭　雄頼

さそくと園のまたてに置露の月ともにそてにみる　守仲

あの花にくさぞ露にまた咲せる草花も愛ぬ秋の園　雄頼

相模甲　笠梨

槙立山加楓一

萩園の路のにたれり引きえて垣くめしくも咲く草

さし桜のあつきよれ花園生にも咲きてと見る垣し露　友頼

園もきかまも露の八きにかくさんかしこにも秋の千草　弥さ女

下総塚崎

いんのまとこと深く園の花さ見せる露草に草の露　稲守

もろ八小萩ある八小葉と見ゆる園生もろけくなる月の影　挺丸

露ちるをみんとて人の秋より押合へさくさくの千草　一夫

星のうちも如咲く萩ふ見付しあの露を枝なからなれ　盛岡　底根

七夕　ほしまつ　同撰

鳴立沢加楓二
織姫にあはぬ物ぞかさゝぎの橋の秋の天の浮橋　上総東金　真宵

待かせてうまく逢ふ秋の夕暮にくつきぬ星の契るらむ　萍

星の袖ひとゝなびくる風の音を聞なく稀き星合の空　音成

撫子の花わく逢ふ秋八つゆよりも契るつけある星此大きさ　泉花

三日月もひつる如ふを一とせのなつかど星八弱からん　蝠麿

鳴立沢
色もくる星の逢ふ宵ふもぐ露の乙女や十宵のうら此梶葉　相磯辺　年久

よき影の身ふそよもあれで梶葉の短冊吊ふさぐる笹ぞうふ　古松

わかき姫の花にもよくへ八さまさる日の出をいとふ星合の空　常江戸崎　飯成

星ふかも小袖ふ見へて姫のたもとも濡る玉襷子の夢　仝

梶の葉によるあれバとく袋小袖うる聊さきもしたん冊　萍

なんぢく此佛の小袖ふそよかる八星の手追ふ藤ふ影らん　名古屋　弘器

短冊の佛の袖とて星まつりすゝ小袖の縫ふ如ろもえ巾　雄頼

七夕宵立ふ星へ人ゐるつま琴ふひとよ切て笹のうさし口　苔成

うるしとつまぐ星ふかし小袖八かゝる袖ふあまるむ　仝

つま琴ふ合せあひつもたなびくの朝とあきるて笹の露に　赤志

梶の葉のうれし面ぐや天の川かけ八またせども瀬八ほし　糸成

わかくしき小袖うらみん逢ふつき八顔ふ宵の星合の空　高安

一秋逢ふえ入の琴ふ結びくる露ふちぎれわる色紙短冊　上総岩和田　濱住

松陰の秋寄もさゝるゝに笹井の音つめり好みくさゝの経さく　一夫

おぬとさしのおるはせいとくさる秋萩の花にも似たし　哥多丸

二葉にかゝ山桂中もいまべきるあき風の涼に白き雫　総丸

松陰のけ坂をわば鳥までまじひかけ紀るる衣くの色　万都子

天の川わたる舟一そうれ定めりのといかあふらん　大枝

星の夕瀬にあふ秋も秋あへつかべし妻迎ひかな　竹女

及びかね紀わすくはてる北川せんくる渋や床にいよらん　枝成

あふ待ひしたくひも袖とよふ長夜別れ臣と見る松陰　上総刈谷　直人

松陰の花さへぞうもかさゝぎのわた待ちんまするむ見る松陰　満来

たなばたに自向の路や三味線や今日の秋ハ出わとふる組　盛岡　竹支

槙立山加楓

つゝわれる白ろ天の川をあさ人との出まぞろ人まかり今の夜　上総東金　真宵

浦廼苫屋

まゐよう惜む床なるにさらくり　秋林亭　竹女

そこそれおりなを　むさしの〻秋

鳴立沢加楓三

ちよまでと　いそひし秋の　ふうくのを　惜しむ名ぞひハ　粉うかなし　秋鷹亭　総丸

魂楓の　一るにあふきを　ゆくよ　あそらう　あんの　仰ぎりなを　秋寿庵　為成

風ぬて　三室の入るとく　こ衣るそれ　あるかの雲や　夕ぐれの秋　呉竹　節躬

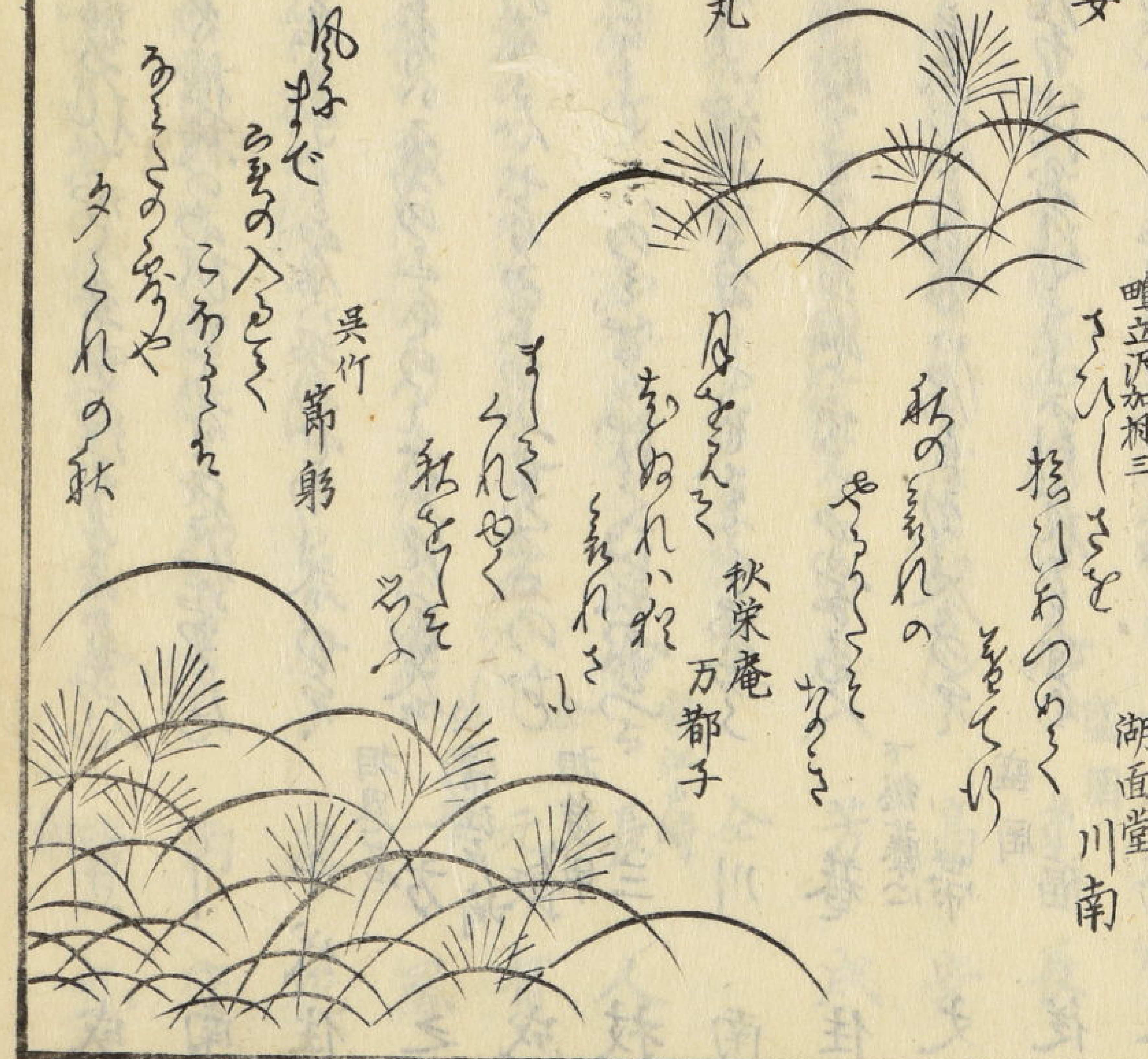
まとくれやく　秋なるを　ふさ

月まえて　声ぬれハ私　あはれさ　秋栄庵　万都子

秋のあはれの　やうらそこそ　かなさ

鳴立沢加楓三

さびしさを　猪おつかく　まそくり　湖面堂　川南



いつはとのえにしの縁に契れてかく年を経る星の契らん
三浦 豆成

霄の方に立る渡しに貸す梶の葉のあひ見る星の戸結ぶらん
川南

逢ふ迄ハとらしと契せし逢ても夜ハ契り世すへし今の夜
千代住

ふた星に出る紙に書付ハ庚の上毛の寸に星合
相思名 方之

露井もうごく硯にたるらん七日の夜を夜の七夕の雲
常江戸崎 飯成

七夕に乾ひの星に逢ふもなのミ聞つけてわするむつき
相愛甲 三技

手枕ぞ二人で契りかし小袖かけて待しくぞさらぐ雲の帯
川南

庇の糸にも近く寄るとも梶ぞ手向ぬとうれしき人
菴住

庚の星に契りに寄る星の今宵ハ渡さりし今の夜
下総藤心 帯丈

梶の葉の露も契られし座方に乾かれもうに引れて星逢ふ
盛岡 福従

七夕ぞく世をまて天の川瀬に手向らん
満来

契りせに一夜ひらき瀬と契りして年を経る梶の葉さ
下守

天の川とぞ渡り切り姫もかけて結ぶ渡る星合
盛岡 糸長

七夕の川を渡る舟にかけて星の手向けて渡るらん
高安

まつ星に逢ふ梶の葉に書きて紙にてむすぶらん
芳成

梶の葉の糸長く寄りて千代の星の雲
仝 長人

織姫の衣を脱ぎて待るるらん七夕の別れ
常江戸崎 元有

梶の葉の文も星の逢ふ夜を待ちてあかつき
仝 一鳳

手向けくる梶の葉に書く文の糸も契るらん
仝 佐賀 泉花

梶の葉の露かくてうつる星の祝の渡る天の川星合
雨守

梶ぞ手向け瀬々の契りてわかれきの星も逢ふ
皆丸

短冊のさらとんやさしげとも牛の星合

かゝるぎの梢にかゝる紅葉の月かげの宿に妻迎ふみ　武大沢 少々女

稲妻やまことむかしの和歌に女子が稲がひの事もつける稲穂　哥多丸

柳樽の世にもてはやされ名に契りてもれぬ句が為の袖屏風して　総丸

柳樽のおかげ紅葉りや昔の世をとりて姉きき筆今の宿　縫女

その門の柳もあやき風にもうるや一葉の妻迎ひ入　雄頼

笹の葉のさゝやく紅もなき人せぬ有明の月や見んとそ　武大沢 歌種

○かし小袖きてそ姉がいと汁の業もよくをとく衣の色　物築

當坐 扇面画賛合　同撰

十三点
菖蒲のゑ
うつくしき舟の中にも菖蒲とはいはれぬるやうにむかしん　哥多丸

月に萩のゑ
照月にさそはれしく露の萩の下露袖もぬれてこそむ　物好

いなの葉と秋に月のゑ
雅きよくそ撫人さびやさゝ月にいなの葉ずゑの露も薫りぬれ　内匠

十二点
名月と経めぐる氏も芋の葉の露の浮世をきえ行く露　万都子

月に萩のゑ
むさしの月毛の駒の足搔きも後の名にちる萩の萩　芳成

女しもふけいひのゑ
女子も香をたきさくる秋に一夜妻寺のかへつけよ蛉の香　一夫

女と見る力有とゝるゑ
風の身にうつ後女に男へし月の更衣のかゝる見えれ　雨守

桑山子のゑ
満月と引し桑山子の弓と矢にとり射る秋を田にかへる　萍

わらちに萩のゑ
妻こひに萩を踏みしめくる紅葉萩の花を尽くしてそぞなく　物好

本れん也のゑ
赤く照るかへるよもすがら紙に押して行く人の世の中や　万都子

○前書の後あへしく
うつろんの中に末の八汐の衣おとく木賃に咲く秋ぞ淋しき　酒徳

袖も紅くもちく衣へ涼しく秋の雨の露を押して紅葉　物築

源氏小鑑俳諧歌合巻之六終

源氏小鑑俳諧歌合巻之七

四方歌垣老師撰

白さうのまき 藥玉

裏徴 秀むすぶあやめの花にかゝるさつきの玉も猶まさるほて　清住

目妙 ちよき根を引き家にまづなをひくも上戸のさつきの宗　上総勝浦町 追風

さつきの雨に落出の功能を顕はせしの玉を緒にかけし藥玉　仝 廣住

五月の節供の重く猪音のあやり文に誂れることもちりまま　相愛甲 笠梨

十あまり五つの緒に久しくつなぎさまをつなぐ藥玉　常江戸崎 元有

臣風にちさく寛さへ玉宝のうわうにまろく白妙の藥玉　絲さ女

菖蒲と添てあやめ花などおほひつけにまさる緑も飾る　守仲

菖蒲より薬のかほる軒端まで小屋にかけたる藥玉の宗　真菊

色よき菖蒲に軒のつらくの掛けたる袖乃藥玉　愛滝

牛川のうた

囲碁　同撰

裏徴加花二
斧の柄のくちるもしらず打かけし碁をうつの友にせんとも　江戸崎 元有

後負ハいどむ碁の中へんに手をくばりしもこれもしらぬ　雨守

裏徴
武者ぶりの勝きろうとすれば仙人の手をもしらずて碁打ならバ　苔成

石の数もうめの碁盤に目をつめれバやがて手をうつにかよひさき　為成

かくも碁に勝つるも負るも人の手をうつのさとりあり　内匠

碁石の黒白ひとつ勝手に目打 碁の形は地面そのまゝ見えけれ　蝙磨

囲む碁に勝負の手を見れば黒白を見てうちかけて石の流れ　雉丸

目妙加花一
生死ともにかゝる碁石の白黒にうちもよ浪の波や漕つらむ　島守

目妙
勝負ひの石ハあれど負後の囲碁に手の勝負まき打の友　勝浦町 追風

売らぬ手をよその桜のうけ持をうたぐれど去るべき手を　盛岡 無名

き手をうちて打さ切る所に斧の柄もくちれときえぬ仙人の囲碁　物好

白黒の鶴が打くに囲む碁も手を打つけて姿々押へる　愛滝

斧の柄もくちぬと仙君のつぶやきぬ人ゝりまれなく囲む碁娯　枝成

囲む碁の黒白の碁石白黒のあとを見てうけものなく　永女

盲人もかんの碁打る碁をうつのめあかりをせあるさ　為成

手元の目さしをふさぐる伏の面をたてゝもおそるゝのの様花　於兎門

陰秋の碁のたゝかひをつかふて見えにくふ又ての手のかゝりことせん　竹女

碁石くらかうかんどんの目をつぶされくよ打ふさにうちる盤の　雪丸

石をもにあらで人目のうちに張くる川 碁ハかうをもうちきえん　真菊

紅梅のうた

寒梅　同撰

裏徴
うぐひすもの経をまなびて咲梅ハ花をうかべてきてなべん　上総岩和田 濱住

よそ目人もさくらとや梅の花尋ねし人の月夜にさく　上総勝浦町　廣住

枝の風に梅のかしこくうちも皆隠せし紛らかし雲　庵住

古寺を出るも見つゝ人の袖にたりし人をひく梅かな　相模辺　年久

引寄せと堪ゆせぬそて中の月のあまどり寄せぐ昔の香かな　名古屋　弘畳

たまされてゐく人も雲も第一の本にかゝりける家居の梅　苔成

香路む夢の中みへの跡さよ出るはる梅の影として　蟻通

目妙加花一
みあるらるの宴さうに宮殿の香知の光ぞも赤くなりぬる　千代住改　文雀

すゞる夜ハ日かしをまてかすみとも見えし夜のうすき梅　入船

目妙
月影ふ見えし一つかな梅ハ匂さへ見えく咲の咲　岩和田　舟丸

此の面影あるはしぐれの風かある梅にうつも有る　仝　濱住

宮の腰ハ数へ日あれや我か梅ものふ見けて白妙の梅　泉花

波部佃
我かおもしや人のこゝろは鶯の声に　おほえく居る第一のもと　相模辺　鶯哥亭　年久

後もうらむかしみる田の囲に菜の花の露もあり又こゝもとえんなり　秋衣菴　縫女

東微加花三
梅も今は咲初　見えく　囲ふ香のあるに　秋夜菴　弥さ女

諸ともに　柳にまかせて　つくりせく　秋寿菴　為成

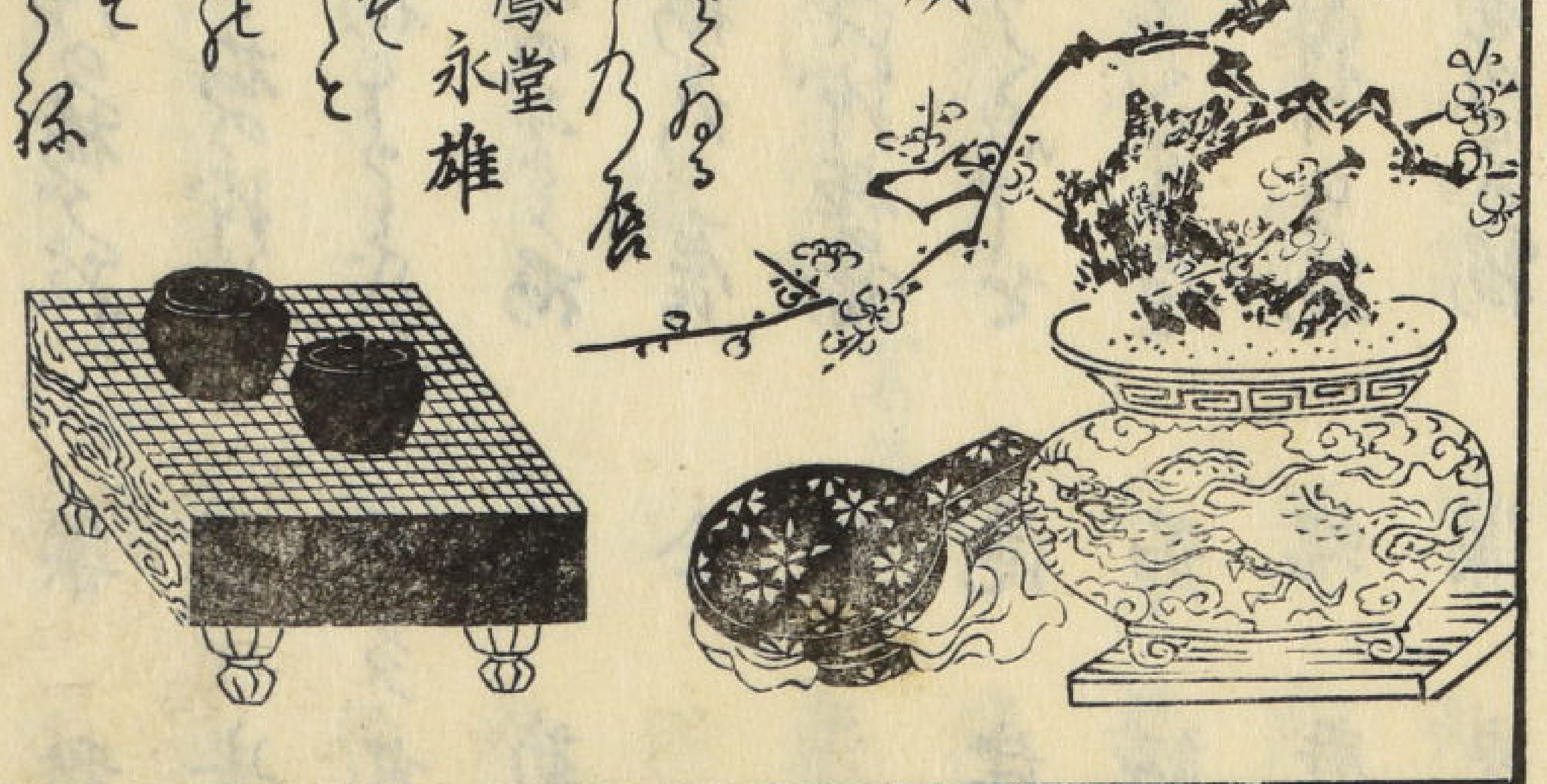
春もゆるもゆけく　風を誘へり　梅乃香　秋花園　こや子

梅をこめく　うつる眺めは白鳥の　暮れてある　とふまでを　かくしてある　錦鳳堂　永雄

錦のあくまで　ひがつのりけ　猶

梅の香にはうらの　我もむかしより　うつりまさる妹か黒髪　春秋菴　永女

いもやせ　ゆふく猶



ゆく〳〵と京へ念かけふ立つ粉の匂ひをつゝむ梅の花嫁　仝

宮造の匂ひはまづ祝ひ綱屋のまめ稚ふ香む許の梅が枝　楽雅

むすめの肉比ゞ不墨をさくむめの香を日ひくり人出も梅の許柱　置安

家いとどたのしき井戸屋にひらくなるむの梅こよひ　哥多丸

若の籬に添のうの匂ひのそれとも香咲かるる庭のこよひ梅　真菊

押ろひとえる匂ひの匠縫いて立つ梅丸　仝

植木屋もひらきし梅をかざして日にくる許柱の梅　仝

若も文よの香をぬきとさんこゝろに梅のあかく咲しを　滝津

こゝ庭の風にむすひてさく梅の木花の香を赤く　節躬

一向の謝を籬に折こゝく気をもひる　料の梅　蝠磨

かおくり比よさと松閣の若にぞ香されたる咲庭のこの梅　満来

若はまだ香も せうとどかの肉に香を白く咲の梅　皆丸

うぐひいもこゞろく咲ぬ家の戸比香にかざし梅が枝　芳成

知らせに二香さく香や吉に折ぞ咲庭のこゝ梅の香　二葉

ここ咲の芳の二比香根ともれ匂ひを添て咲の梅　愛滝

香てのむ家く夜の家比なりともなりて香もとに咲の梅　上毛後閑 比楽

裏徴

妬恋　同　撰

つり縫を消えも香ながきむすびの大字文書つけるへたゝくめく　為成

こゝまでと立ほ恋ねど袖の火のまもる妬ぞ打むくろりける　満氷

目妬加花一

解けたる心ぞ縫ひ比ともかくにえずやかへく結ひ茶え　哥多丸

目妬

知らぬまで根にひくまで恋ぬれどもむの香きの香比も妬え　勝浦町 追風

縫くるもや葵車比わかくまよりかへるのさ浪くてゆるかん　永女

おとろへて築じ松まで老ぬとこれバ猶文ほどく千とせ　万都子

む宿にぶあまし〳〵人もたまれ行くちとせと君が種の花　真顔

○

網代（あじろ）

穐長堂撰

鴨立沢加抧二

都出の八千宇治川のあじろ木ち旅中の興ありしことか　内匠

鴨立沢

あ湯ハ又ぜにふ人あむあじろ人舞に魚のよるのありさひ　勝浦町　廣住

あじろぎここにかゝる人をられうと姪子の氷魚も境をさこさ　樂雅

岸ちかき宇治の水れあつさめて氷魚も網代にきさらし　守仲

こよひしみ世を渡るもとあじろ守の庭ある氷魚を見きを　永女

採もちて氷魚あじろ守あじろ守の水さとみる宇治川　みや子

氷魚をとるにも松吹舞を以とりての宇治の夜風　満来

氷魚ともに千日まで氷業のよるの舞によるあじろ守　雄頼

槙立山加抧一

浮世をむすぶ宇治の床とて浪やあじろの床にまかる舞も　勝浦町　追風

名にある宇治の川風のひとごとさゝに氷を結ぶ宇治のあじろ木　泉花

さる秋くれ氷魚をもしふ手ひく人をよる松うちの網代木　盛岡　無名

橋姫のむすめの氷魚ひかくをうん松とひをたくるおれあじろ木　江戸崎　元有

網代守かがり焚火のこゝさゝに氷魚をとりあかしてもとともし　樂雅

さん代の律やうりことにあじろ木にひとつあじろにかゝる宇治の夜　下守

あじろ木にかゝる紅葉ハ橋姫の袖の錦ともあじろ木　磯辺　年久

今ひとの袂ではやのよるを結くあじろ守は八重霞にかゝるき　川南

網代守つゝの浮さをさせども氷り乍ぐる宇治川の夜　万都子

とりしやふかりねにおれあじろ守の中松も氷魚もぬらん　哥多丸

まをあふかハりくるのあじろ守こゝに松吹までいをとるにかり　高安

田子浦にたゞみにかゝるおぼろ月あまれ舞のひもをもとけし　一夫

たなびくにかすみぞ三保の松原や空にかすむおぼろに舞ふ扇　竹女

盛岡
岩田のよは吹れてくもの網代にかゝるひもとしてかすみの衣　不死躬

松風のひもゆるく舞ぞのおぼろの袖にあやまつらん　全　酒月

石吉田村
浮世を松に世の塵をも知らずして空をまで飛鳥をとるおぼろ　真水

なにも浪のおぼろに浮島をとゞめ雲に舞のあまりれ浦る　島守

松の木の蔭
秋菓　同撰

鳴立沢加楓二
みきせし木の葉も落て去秋の名も空にありの柳　蛾通

雲波このまゝあまる落葉のいろぞ積に鏡をうつむし　雪丸

こまとせに見しおもかげなくせし花の露との契の秋桃　節躬

鳴立沢
岩和田
こゝの杣に雲もなく秋にしるや錦ひこ浪の花の菓　濵住

岩根よりしらしつまくに菓のつる根をおしのけとも　苔成

やどとるも花の色のにたれなん清水との月柳を見せる　川南

錦まで見とひ春人のまれしも花あつめし見る枝柳　哥波成

見るさまに花とどる秋露花より秋風のより見し錦の枝撰　滝津

ひとくさる錦の名も柳よりも春る月の色ともに露の　縫女

槙立山加楓一
土浦
苔白くなく紅葉つる渚つるまでも月に花に色の秋の　万麿

岩和田
錦の夜露にきの名の松の枝の色の菓　濵住

いで露花ましらに露さえ見れ月も月のとよせぬし花　夜宴

浪柳も秋かぜの散る庭の口もおれば鏡の枝のいが菓　為成

木の根りと松のとく色紅やあき色との露のもとにん　哥波成

影人の秋の木の実とり松よるその柳や山の山菓　波々枝

ころハ秋の袖にあまれる嬉しさに今もいれてひろふ柿の実　秋金亭 奇多丸

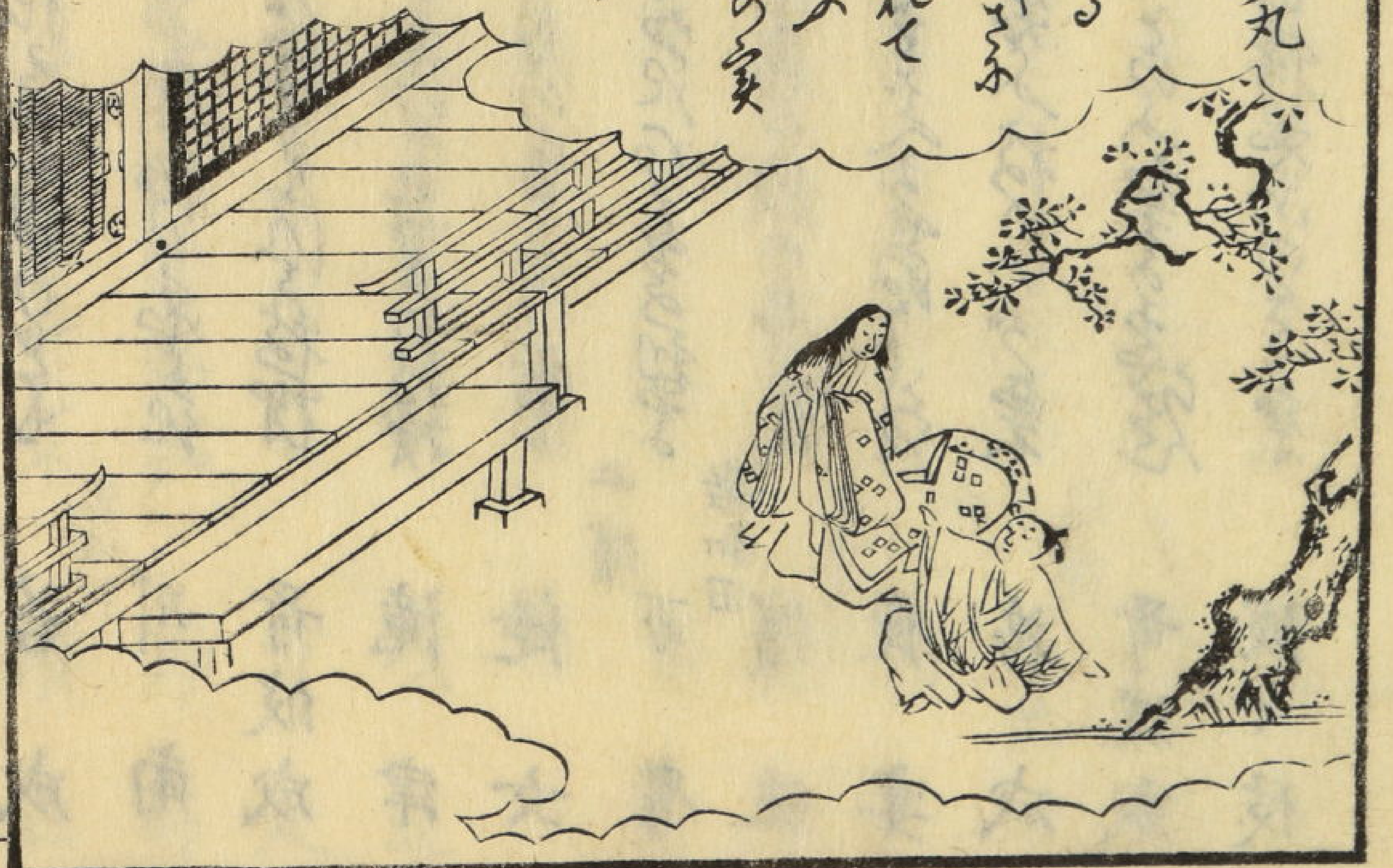
人種も世に泣に秋そのふなる名やこれ華　秋栄庵 万都子

めを出しつ木の実をうせて法らしく耳なしとても知らせぬり　川島 養住

浦廻笘屋 比不柿の

手義にあらそふりく打きのかつきこそ和する花の子乃柿　湖面堂 川南

ふさくしきつりせ中をそ総角のゆめり親の結ひ垂これ　秋鷹亭 総丸



たわゝにもなりんと村長のかびもさせぬ鵯の子乃柿　若成

あまた宿渡すもおのれの中にひとしお色の赤き熟柿　竹女

柿の実はゆびやし庭の手をしぼ熟もあまさぬ一つ　永雄

熟しける岩日の色見れ枝柿をあぢけぐく狩りのかん　入船

世にしむ親の心見れいかにおまへて見れ鵯の子の柿　真菊

紅葉の中に見の庭より林秋人さる御相に味　内匠

あまりぞうまき色なる枝柿を人のむざんと許ぞ岩　江戸崎 清女

撰みつも底なけ岩行中に熟柿ハ様のかくやぞ妙く　愛滝

身ごとに庭のぶどうれたりかくのさきにせぎりを酸ぶお女子　長房

上えなき梨子の風情や法香の志てゝ渦ぬ秋の葉柄　武大沢 少々女

見ぶ繁れ日をあれしハゆのなくつまろ四をま知あろん　捷丸

総角のまき

幼恋　同　撰

鳴立沢加祝二
ゑふとりくみにくせし玉章たこころさあやの糸をさゝらん　磯辺 年久

双六を誰とけ数の石すぐれども恋のふ意見とまぐもかし　雄頼

鳴立沢
いひけるも花ちさきの手綴をいつ筒にかけくむすぶ初恋　泉花

末綴になりもかくむの根にゆる総角ならはどうちらぬ　盛岡 無名

宮の内につがしも恋ひしかりしもかくす角袖　磯辺 人真似

かけじといひけるより一節に深きかはさる数恋年　楽雅

まぐるも羨家のいひけるかくも恋を結ぶ総角　物好

あつまるも男のいたづら八幼ども捨ぶる心を稚結びしく　孫さ女

姫かさへん花く男のかを遠ひいで住もむ恋の初元を　磯辺 年久

男子花女子よりもくさに姫小松も深しちぎりの　［源氏七ノ七］　於鬼門

まろがくけかゝることといひけるに[illegible]よりも来る末の松山　真菊

口縫とはまた新玉の手もむすびかへつゝ筒のいたゞきを　盛岡 鄙田

書初めはくあげぬ恋をさへ[illegible]結ぶ恋ざるまに　雪丸

いとしさを取りなる数よ筒井つゝ井筒に結く恋なる年　内匠

筒井つゝいひし恋に遠ひたる礼まさる年にかく結ぶ恋かし　節彰

かんざしの花もいつも穂も美しく恋とゆひさぐ妹が嵐　大沢 少々女

家のさやくたびひに結ぶ恋かりそいとけかしとは名ハざり気　槌丸

書きぶ北二葉の恋ぐむ恋刈し深の霞や恋をさゝらん　島守

そつゝ数そとも恋くぞふるの糸まき初の恋れの初桝　二葉

人恋ふ数恋の色よを遠ひての札射とるいたづら娘　為成

槙立山加祝一
まろがのよし北まれる数恋よる住葉さぐも枝も結ひし初ちり　勝浦町 廣住

手ならひにつけぬ八百屋をよくよんとよんお女子　愛甲　三枝

ゆきをかくいろはの文字の墨ぞめうつるとそめみる春の初音　仝　酒盛

とへどもいはぞの杜のうくひすもまづ初春を出来るほのあ八　下総塚崎　涼音

初春をかざる羽子板の出すはるによくうつる春の空ぞ初めし　永女

いくつかの幼あそびのみなごの事くはへて嘉を君が春　万都子

紅にかくし振袖も赤くかざる初春の袂の花の振ひ出しつゝ　総丸

初めての歌の恵比寿一限とよりの年こゝろの清出　哥多丸

おもふことたのむも恵の年より我君がん(?)心にある春をぬる　友頼

猿のあそくん(?)はさかくされぞ来つまりことにたのしき春の色　蛾通

初春くそまで小よろ縁の儀くと見る若年の初も出る春　川南

かんざしも縁を廣くゝる春にかんつれきる娘が初恋　縫女

うた主をつくれど座さ振袖の八つ口よりぞおくる初春　友頼

顔かくし身をこころさしのぶ前髪ゆひし振袖の姿れ初恋　皆丸

対をもときたるものの目につやかくまえがく君が初恋　芳成

みなみひのをき
春山　同撰

鴫立沢加楓二
さつきひやたんぽゝの菫をつゝとされ初春に様を添る春の山　江戸崎　元有

富士の根は波にかくれはつゝむ出来とかりくる春ぞめでたき　清住

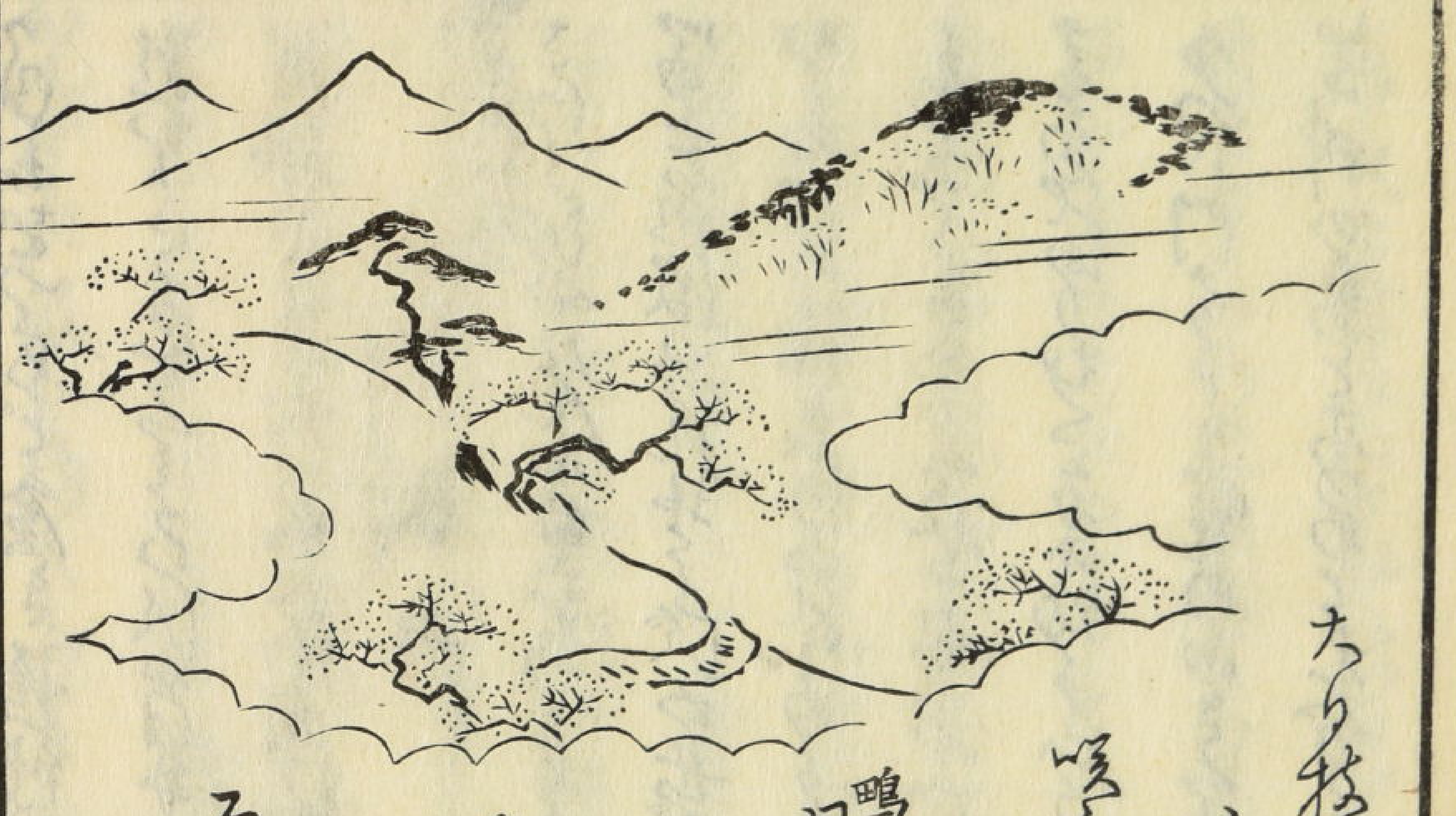
かゝのけの榛名の山に花ありぞ門松の飾りいとゞ添ふ春　江戸崎　鈹成

こゝろにて家うつれに君が代のはるはつもり見るこころ　総丸

春の色ありむくの方木にほるゝ山くしの縁をこそ成あり　仝

きのふ八門をあけて雲の山さくらもなく春をくめぐる山　真菊

若竹の春あと永の世とさん入ることゝひ出世し春の山姫　竹女



たち秋と さきち霧に 庵のまへ
乘る秋も むらさきの袖
与鳳亭 枝成

咲ももし をとこへしくまよふらん
引きまても をさ 山のうち
鎧渡亭 萍

鴫立沢加楓三
同やまかへ 松ぞ中も
みさすしの山
ちとせの櫻さえ埋めにき
國土菴 樂雅

業のちりはつれども 世のちりに
こころそめぬ 秋の山橋
秋花亭 真菊

為すぬれし 霧の袖や かりぬらん
ゆかりに そむる 紫の色
哥多丸

鴫立沢

旅の目にもよし 嶋も山の をちかたに 袖ハさよの ねさむ
岩和田 濱住

ある日の 空の行かふ 月の まどかなる 山の ささなみ
愛甲 角文字

をとろびし 霧の袖へ 風のまに 入れば 嶋に 秋の山影
相高森 桃畔

かの代の 露の袖や たつかりと 鳴ぞ あれ 秋乃 山雉
物好

千秋の 色の 様 ほりよし 小舟 見茶屋の 名ある 秋の 山路
菴住

終保雉の 細工の 色のよ の 綾や かくれ ゆけ 秋の 嵐
夜宴

ある日の 空 ものびく 山ぶきの 色も かくれ さえ 秋の 夕べ
万都子

手蔵の 錦 とこえて 様ぶに けし 霧 もむらさきの 色
総丸

むの 秋 とよろこび 鳥 ごろく との どかなりして 嶋の 山の 端
仝

大江 霧や 霧の 浪 にかくれ 嶋の 鳴の 手 もうつ させの 海
名古屋 弘器

大空も 雉とんで ゆる よの 山 ちる 紅葉 あけの の 空 ばかり
盛岡 底根

春雨て八重にもならてかつくほむ花まて[illegible]山桜かな　耻文

あふ蝶のむすびおくれ山ざくら七日八日てちりし花さし　真菊

[illegible]　仝

笠小寺[illegible]の海と[illegible]ば[illegible]の山桜　長房

さくら[illegible]　愛滝

山さくら[illegible]八日[illegible]のまゝおけおの　芳成

槇立山加楓一
[illegible]の[illegible]山の　泉花

山里も[illegible]の[illegible]　磯辺　人真似

むかしより桜ハさくらわさく[illegible]　雨守

[illegible]の[illegible]の[illegible]　物好

春雨の[illegible]山の[illegible]風の[illegible]　相思名　方之

[illegible]月　古松

[illegible]　清住

[illegible]　磯辺　年久

[illegible]　置安

[illegible]　酒徳

[illegible]根　千代住改　支雀

[illegible]　総丸

[illegible]　仝

春されバ[illegible]の根[illegible]さ　名古屋　弘器

[illegible]　真菊

[illegible]　盛岡　底根

[illegible] 竹支

[illegible] 縫女

[illegible] 三宀子 蝠嘗

[illegible] 満来

[illegible] 物簾

當坐 扇面画賛合 尽語楼大人判

十五点
[illegible] 有人

十三点
[illegible] 大枝

十三点
[illegible] 雨守

[illegible] 仝

[illegible] 哥多丸

十三点
[illegible] 仝

[illegible] 一夫

[illegible] 仝

[illegible] 雨守

[illegible] 楽雅

[illegible] 琴人

[illegible] 真菊

[illegible] 内匠

源氏小鑑俳諧歌合巻之七終

俳諧歌源氏小鑑八之巻

宿木のまき

旅宿

四方歌垣先師撰

裏徴加花二
とかり川ふねにまかりて旅籠屋の料りへ入てあへて　照道

裏徴
旅人の枕にきける鳥声のうつゝにきて猶ありけり　名古屋 弘器

川とおふにかはくまつとまり宿に日のくれにくく聞ゆなり　総丸

箱根山越ゆく宿とる関守も名目のかぎりみするまゝ霞　清住

大井川とめられてうき旅寝にも失なふ雲の水はみれども　奇多丸

旅ではげまして連れも宿とれば数もたゞ一夜に結びあり　内匠

旅さとは草ふかのこゑにかくふねとまりぬる旅の宿　上総岩和田 濱住

目妙加花二
須磨日越せし山坂を又弥生の播磨なりて見えきとまりまさる　愛滝

目妙加花一
そのれとも枕かりにく其民宿に旅のあげなや藤沢の宿　清住

菅の笠の露も見ずして此軒にとまる梅津の宿　真菊

菅笠に掛廻とせる旅人ハありくもよくたくらんず　物好

目妙ハこれつけ駒を旅ぐると鶯人もおれ生ると寄る浜松　清住

春の日の暮とありけるまださぐれど旅の歩みまる哉　名古屋 弘器

知より旅行くこゝろもせまる浜松に横に車せとある宿り　泉花

草枕むすぶ旅の夢をむすむと笠の紐まで[illegible]宿　節躬

家にあれバ旅の浜辺も恋しくて旅にあれバ松ぞ恋しき　苔成

旅ゆくひとし川の辺のハさもかくて茶屋をとまりくる宿[illegible]　菊芳

ちるとも雪とぼしかるみぞれの泊りいそぐ旅の中島　一夫

旅の宿木の葉ふらんのかりねに[illegible]旅の袖ぞうるほき　仝

菅笠をくとまれ宿に[illegible]ぞ強き雨のおとかな　奇多丸

さびしさに独ゆきひとり旅寝泊りのとまりぞうらく　磯辺 年久

もの淋しさをせてむかしひとり夜寒ぞ旅であるき　雨守

二百ありとかいわれ旅宿に寄せ[illegible]の夜の往来よ　滝津

旅の宿つれなりも旅なりのかりそめの夢　雄丸

うききよの秋の夜しのぶ旅[illegible]　有人

こゝろ股八春の[illegible]も旅のかりハむさしかりける　春子

初あさくこの宿川を[illegible]やかぞふるほど　江戸崎 元有

旅人に中ぞりとせて[illegible]もとぶ[illegible]ゆく旅の宿　真菊

豊坂に旅籠ハあれど[illegible]人ハ寄らし　愛滝

やどりの風をたゝきし[illegible]ゆうなき　仝

夕月の[illegible]川と旅宿　仝

沖津浪錦田浦のあらし寒しは若菜摘耳にとまるか衣　雄頼

菜刻くと鳴る鞠子の旅寝より宿に眺めし浪も地にさし　入舟

聞とふてよ鞠子の宿や鞠子も加るかや日を数へつゝ　竹女

旅籠女の中にの紅の戸に加へ稼もきもんと寄り花の稼ぎ哉　下守

心ね作の名に添ひ流りとなり宿毎りき宿のうつ時　岩和田 濱住

井筒どく

寄草花戀　仝撰

裏徴

飛らりもし君ハ見しうち生れ草の下に咲く草やありなん　三浦 豆成

忍ぶるいのち添ふへきべき床ありや花の下に咲く宿の情さ　照道

物思ひよ暮の日のいのちさへつまひと夜に覚もひらく嬉し　節朗

恋風の旅く尾花の葛の葉にうらむくとうらうみ嫌り　総丸

目録加花一

縫ひ寄るこゝろのつまに飛影のうちにも覚えしき床しせまし君　有人

穂落るの秋くる秋へ恋しき宿の花の下にそこと恋しき秋風　雪丸

恋の中に結ひ花の細にふみもまつがりし寝の悲さ草　かご女

目録

さくら花は手向花またまつ香見るやつりの花や床しきの恋　総丸

恋草のふとんの中に恋ひくることも寄る花の咲て嬉しき　清住

恋初し娘が紅の娘気でそれからつ日に秋ちかき乃　菴住

待ちあかりされし夜ハ萩の花ゆうしくも秋の花も逢　祢さ女

萩の花秋生れあれそ宿のいろさめ紅きつ恋ぞ乃き　満来

いもくもあかつきんの夕花の夢にもあと心バ花の恋初あり　仝

紅葉の秋の日に恋かくみのなつかしき哀も秋晩　物好

添木のいもやとふみのかきぬせきくに咲せてもの今さ　相思名 方之

紅葉のつきより細く恋のれけのよ夜の恋に紅葉の秋晩　長房

仇し家のこゝろ秋の初かぜにさへ[illegible]萩に　真菊

かよひ路あらき軒の[illegible]　上総岩和田 登度女

松のたれ[illegible]人の[illegible]　仝

宿の名 伏屋 仝撰

裏徽加花二
[illegible]　枝成

園生やふせ屋[illegible]　奇多丸

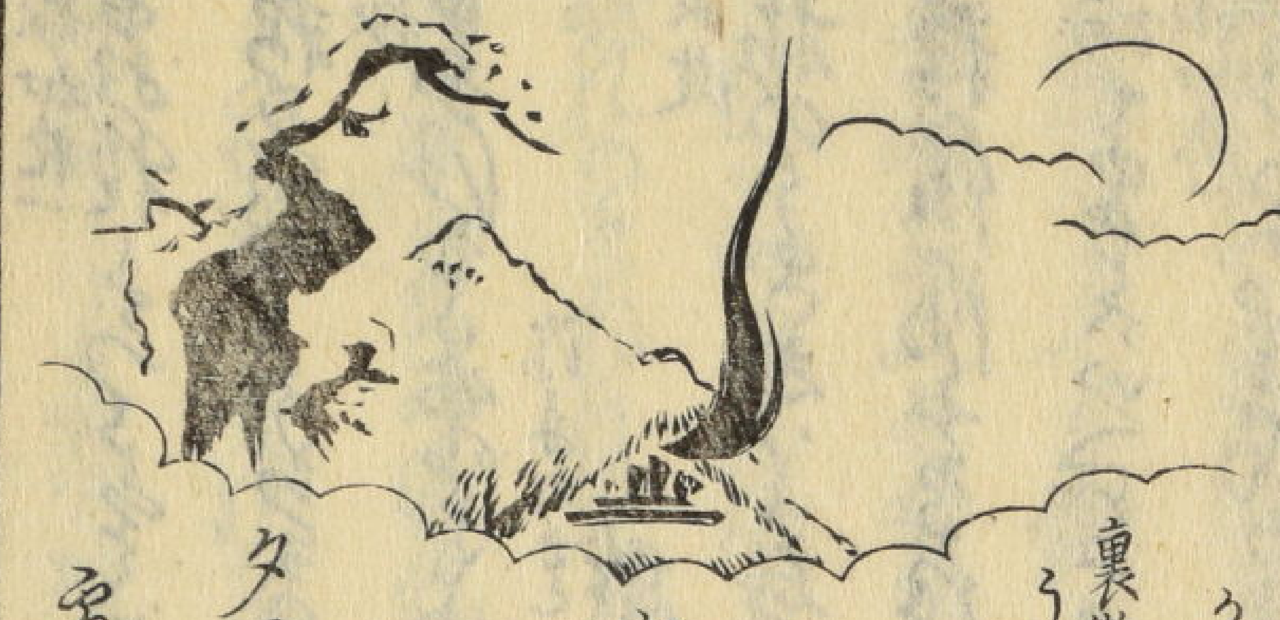
裏徽
田舎の酒[illegible]　高安

[illegible]　奇多丸

[illegible]　萬象

目録知花二
[illegible]　有人

[illegible]初雪　江戸崎 清女



波那細

[illegible]　秋蓼亭 物好

草枕月の[illegible]伏家まで[illegible]　秋花亭 真菊

裏徽加花三
[illegible]　鹿寿庵 蝠麿

女郎花[illegible]　呉竹 節躬

夕[illegible]　三日菴 愛滝

目抄加花一
雨の稲くうつるとそさへに枯れしも仏座を出す大津絵と見えけり　楽雅

目抄
秋のよはこゝろもちかねて藪つもる抱く猫が仏座とる月　満来

目抄
虫の音は浪に寄る夜も出げく隅田川銭の手に御免つくれば　蝠麿

浮世のまき
戯画　全　撰

裏徴
旅のうさおもひ忘れつゝそ静かに大津のさとにされ絵をめぐ　三浦　豆成

稚児風にもる押絵やうづみの毛をもちて絵筆描り　泉花

ひのでまとへいへど一風おこしる扇にも絵を描き　愛滝

目抄加花一
かくれなき風おりて押しのき筆をとる絵の行くえ見えず　清住

錦絵も白き絵に中に三所絵をうかがう書　愛滝

目抄
行気かくのそもんのうごくまつし女が拝む女の歌　川南

目抄
双六の一つあまれば大津絵のわと入れる手を祝ふ　置安

耳ありとものどち花の色絵やゝともおもくまつゞわら　泉花

風情入れきた写絵とゝ大和も行く見え寄る地名かな　萍

さゞ浪の大津絵中もめんえんのあるたゝれ絵や鬼の念仏　一夫

大津絵と見ひつき手先きを顔を手に出せし筆取りあへ　雄頼

秋桜にまぎ入り柳てきまぎくらりく江戸の空の月に絵　真菊

手もとの文字をぶらぬれた色や姫屋のつり見絵ぞかりける　ミや子

南北の略画より手本ひと筆さえ起き草々　江戸崎　長房

銭れのまゝ絵とそぞてかくさめつ喜れ日あしのまゝ入れく　元有

筆雅の色の寄絵みつくしてともあえ一枝が筆　内匠

うちむれ書絵の帰れ一枝ハ世の風に吹きとられけり　入舟

寝て張し手本ハ時に大津絵やまゝもこびての歌の仏　全

萩[illegible]手まゐら○をとり合せ[illegible]あつせにむつまじき友　真顔

秋長堂撰

別恋

鳴立沢加楓二
[illegible]の[illegible]をかりのひとりねにぞ[illegible]　川南

[illegible]八[illegible]のとり[illegible]の[illegible]も[illegible]　物好

[illegible]の[illegible]を[illegible]きの[illegible]　奇多丸

鳴立沢
[illegible]の[illegible]むわけ[illegible]の[illegible]　総丸

ゆき丈の[illegible]と[illegible]の袖　仝

[illegible]の[illegible]のの[illegible]十[illegible]の[illegible]　泉花

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　節郎

[illegible]て[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]　酒月

盛岡
[illegible]の[illegible]の袖の[illegible]　鄙田

上毛後閑
[illegible]の[illegible]の[illegible]　比楽

[illegible]の袖[illegible]の[illegible]　奇波成

[illegible]の[illegible]の人[illegible]　真菊

[illegible]の[illegible]と[illegible]も[illegible]　奇波成

[illegible]の[illegible]も[illegible]　友頼

[illegible]の[illegible]の[illegible]下り　長房

江戸常崎
[illegible]の[illegible]の[illegible]と[illegible]の[illegible]　元有

[illegible]の[illegible]　飯成
仝

[illegible]の[illegible]の[illegible]　篭女

[illegible]の[illegible]　物種

[illegible]の[illegible]の[illegible]の床　愛滝

うつり香を袖にきぬぐの別れしをしかれどつき横雲の空　萬象

わかれてはつきぬ涙のしら玉やわか袖にかゝれをつなぎとめ置　岩和田 登度女

引とむる袖の涙をみひの水にのこりしく別き香の床　仝 濱住

わくれにとけゆくとなく帯をもむすびの別れ行衣の鶏　仝

うらめしくおもひしつきなくとりの音に別れし袖をむすぶ夜の　槙立山加枕一 仝

とりの音をうらむきぬの出来て暁もやききぬぐの袖　総丸

嬉しさを語りつくせどきぬぐのなごりぞ袖にのこるかなしさ　清住

金衣まで花のなかにうつりぬる嬉しさはかえりつるせぬ夜のきぬぐの袖　仝

鶏も情ありて帯をしめくとむすんで結ぶも帯の緒子　蛾通

うしろ影一目みてくもしきとまり人目ありやと思ふ別れ　菴住

妻やなとにかよふ夜の花やのかへしはなし　樂雅

霜の朝つきぬ別れとおもひにかへる袖にて鳴くとり　盛岡 底根

その雪にまでうつりたるかさねつくぬぐの袖　技成

帯をつゝ引もるまでとり結ぶ程もあらゝむきぬぐの空　上毛小俣 竹雄

だきしめて惜むなみだを帯とかうあきぬぐのころ　仝

別れ来てつきぬを帯しも涙のわきにむすんと思し乱るゝきき　孫さ女

たまくのきぬのつきぬ別れをむすものにたよわれなる　万都子

おもはくは帯の結と蝶丸のそのこの月も涙のあかん　奇波成

今来し弟子の恋の袖を引まもとわくぬ別れ　雄頼

お別れにまくる夜わかぬ袖をかくりおくれ見んず　相磯辺 年久

わかるゝ別をえて伊勢の海にむすびの袖のそりくとまく　於兎門

こゝれてのくそと分せんそつり香の袖にのこりし帯うかゞ紋　友頼

かま路のかゞみの雪に映れなどひとゝだまつく暁の月　満来

生ける女にやとおもふ姿を映りけどまれ路を又迷ぞあるき　仝

雲の衣おもきのうすにかけて月を見ぞゆきぬぐの花　総丸

入日をみハかくさる残りせうくしてうつらひて終りさゝの此の路　高森 桃睟

余情に胡蝶に胡子のゝかへ入もくしたき如くの鶏　赤六

引とむる袖にかゝぐれやせ見えたるにおるまるこれ路なき　雪丸

去姫子が雲の形に姿恨の花へさそひてぬぐの袖　江戸崎 飯成

姫とそ路やのとまやの吹むくかるきてむる声の哀　竹女

かの路ハ夜を見れのこけ衣きぬぐの夢まぼろし　内匠

嬉作の糸遊　仝撰

鳴立沢加枫二
まの此家の夜月くさめやさても見れ枕のとろき　為成

[illegible] 常 江戸崎 清女

[illegible] 内匠

[illegible] 岩和田 登度女

[illegible] 濱住

鳴立沢

[illegible] 仝 照道

[illegible] 蛾通

[illegible] 菴住

[illegible] 守仲

[illegible] 高安

[illegible] 節郎

[illegible] 菊芳

[illegible] 為成

[illegible] 哥多丸

[illegible] 川南

[illegible] 尾 熱田 恵頴

[illegible] 於兎門

[illegible] 満来

[illegible] 真菊

[illegible] 仝

[illegible] 滝津

[illegible] 雪丸

[illegible] 縫女

槙立山加楓一

まれバいとせき目にさぐりの一日をさけて枝が花枝　川南

さくらびの日本もとあらん蝶々の中の胡蝶とおもふ花枝　奇波成

うつすき桜にあびく春柳や風にわれとる影のいとゆふ　泉花

花見にもとめつゝざまる蝶々ハ中々のたゆ花ひさしくて　夜宴

御あたるとくべの中に人の歌もたゝ花射く人の花枝　友雀

花枝ハあつ枝むすびて引ちん地にもくもりたる春桜　萍

蝶の似くちりたいかれせき目もいと継しと枝が春の花　相磯辺 人真似

花が枝蝶譲りその花桜のよりもよび世し日和花　清樹

ちりとみえ日本もとくまびかれバ又露の散来に枝がけるふ　物好

とよとぶにむ風の中も弥しくちりく色も枝がのどけき　ミや子

さかれのいとせき春も日のよびつゝき桜にかけて枝が花咲に　愛甲 笠梨

花見ハ枝が晴花とさく[illegible]もよくさきて浦[illegible]　相恩名 方之

いくまで惜むこれの山桐さよりて[illegible]花のいとゆふ　江戸崎 元有

ちりくと花にわや織る花中の蝶々の袖[illegible]枝　久子

いつまで花残り[illegible]いとゆふ[illegible]露の袖やなびく　菴女

せ家[illegible]花の[illegible]袖やとめど[illegible]花枝　入舟

[illegible]仲の[illegible]のびて[illegible]　萬象

いつくに人の目とえちくつけど[illegible]のゆふ　岩和田 登度女

[illegible]をむすびの[illegible]べのいとゆふ　仝 濱住

試筆　仝撰

鴫立沢加楓二

大[illegible]の[illegible]　蝸磨

鴫立沢 [illegible]梅園　清住

[illegible] 名古屋 弘器

[illegible] 節郎

[illegible] 孫さ女

[illegible] 雨守

[illegible] 岩和田 登度女

[illegible] 古松

攝立山加枇一

[illegible] 酒徳

[illegible] 泉花

[illegible] 上毛後閑 山風

[illegible] 於兎門

[illegible] 川南

[illegible] 愛甲 三枝

[illegible] 内匠

[illegible] 篭女

[illegible] 苔成

[illegible] 下守

寄夢祝　全撰

鴫立沢加枇二

[illegible] 一夫

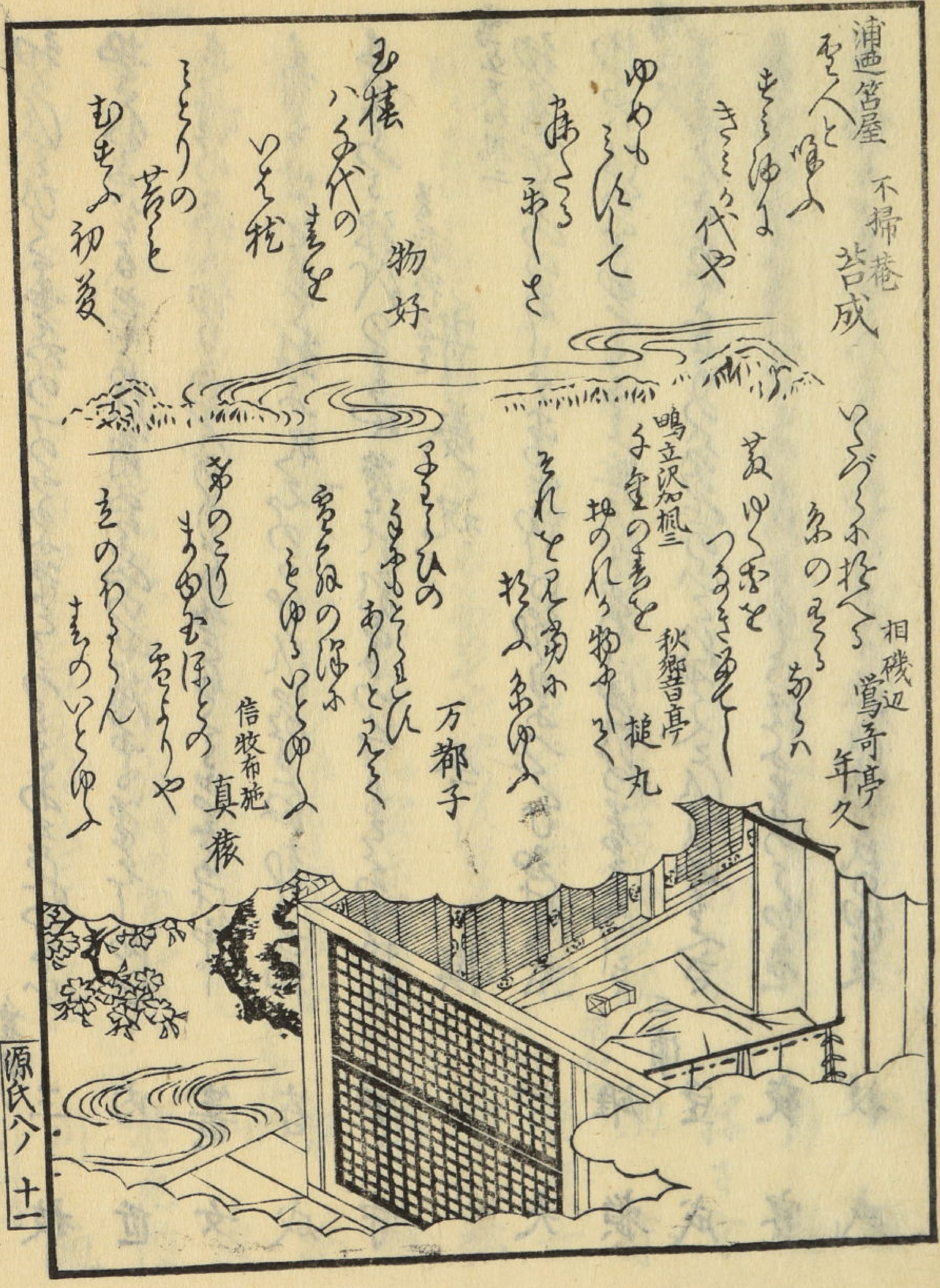
[illegible] 雄頼

鴫立沢

[illegible] 三浦 豆成

[illegible] 夜宴

[illegible] 枝成



ふたつより君の齢を[illegible]　上毛後閑 比楽

[illegible]青柳の糸　萍

[illegible]　奇多丸

君が代の[illegible]　高森 桃睟

[illegible]　竹女

[illegible]の秋　万都子

榎立岩楓一
[illegible]　仝

いく千代[illegible]　奇彼成

[illegible]の園　芳成

[illegible]　為成

邯鄲の[illegible]の秋　繁留

ふるさとへ佐倉しやむさし野をたちかけりつゝ素麺の菱　雨守

東家も菜のくき揚げ久々つゝり物をうるをやめて見　物好

山の如き餅をかゝみ米俵菊の花の香をそめて見　真菊

初鳥かけもめてゝ見擬宝珠のこゝろをとみにつむ霊子　総丸

めでたしとことふきの春の雲の内に初日さして松も常に　愛滝

つれ彼岸ともにひとりなくて出で家の縁積　物藻

當坐　扇面画賛合　月下亭大人判

十三点
寿老人の
素盞之八雲のわりと倖えの川にそつゝむ郷の二つ影　菊芳

翁ふくろうの
三番叟をふみならし扇をひらきとめて島一むれ　有人

猫犬さくらに蝶の
物をつゝ例をかさねはいつしか月日の風をかほる哉　物好

十六
やなぎにしく
ゆかしき柳も楊とえだを撰ハおひさく春をもて結ぶ縁君　不知詠人

山水じく
ひろきよに扇の餅をうられ出て家のさきに見えて霊松島　入舟

かきつばたの
郷とも彩もえかはらぬ子やむ女ハわりに笠とかさ見ゆれて　菊芳

辻占の
かくわりに多つけるもよし河原へ芸ほと財にとゞく辻占　愛滝

たゞよふ舟の
白鶴のまひ緑樹住よき郷さんハ浪もつるゝはむかひ給ふ　支雀

田刈の
かりあつるとこの年若は先へとて手もあまれる穂ハ穂　川南

井筒に菊の
筒井つゝ井げたのぞくまきつくえへ行のくだくだしきる　滝津

○扇子の絵あへしらく
稀に井升もよりよひとるをそへりとる実のこの家これ　音高

納會　雪

四方歌垣老師
鱗月亭君　撰
秋長堂主

四十五　鐵十五　秋十五
初雪をいとへる人のかまでは花をと雪にえゆるかし旅　奇多丸

十三　十五　十五
冬ごもる花桂のつまもれよんのとや家へ雪を運ぶむら雲　洛陽東山　蝶々子

相磯辺

[illegible] 年久

[illegible] 愛滝

[illegible] 甲良

[illegible] 就彦

[illegible] 真直

[illegible] 照道

[illegible] 総丸

[illegible] 仝

[illegible] 大枝

[illegible] 真長

三浦

[illegible] 豆成

[illegible] 真菊

[illegible] 雄丸

[illegible] 永女

[illegible] 楽雅

[illegible] 萍

[illegible] 夜宴

[illegible] 苔成

[illegible] 雄丸

[illegible] 空寐

[illegible] 節躬

[illegible] 孫さ女

十五 かゝりもせず[illegible]の[illegible]夜の秋の[illegible] 総丸

十三 [illegible]のこゑ[illegible]初音を[illegible]の[illegible] 滝女

十三 一体[illegible]白妙ぞしの[illegible] 愛滝

十三 初雪の[illegible]人[illegible]消え[illegible] 万都子

十三 [illegible]消る初音[illegible] 於兎門

十三 河[illegible]けば[illegible]の[illegible] 徳安利

十三 [illegible]小[illegible]乃白妙 支頼

十二 [illegible]の[illegible]八[illegible]の白 柿種

十二 [illegible]のとぢめや[illegible]とまる庭の世の雪 高森 桃酔

十二 [illegible]の入る山を[illegible] 真春

十二 [illegible]の[illegible]除の[illegible] 真長

源氏八ノ十四

十二 [illegible]のつゆ[illegible] 十二 奇彼成

十二 [illegible]の[illegible] 十二 有人

十 [illegible]初雪 十二 雄頼

十 [illegible]の[illegible]の山[illegible]の[illegible] 十二 泉花

十 [illegible]の[illegible] 十二 良村

十 [illegible] 十二 琴人

十 [illegible]の[illegible] 十二 蝶々子

十 [illegible]の松の[illegible] 十二 菊芳

十 [illegible] 十二 菊女

十 [illegible]のおや[illegible] 十二 まさ女

十 [illegible]の[illegible] 十二 満来

十、、十二 篠の先庭にふる雪や袖ぬさし風にまかせて庭のしら雪　真菊

、、十二 十二 ふりそむる雪に笹原ハさんざんの音も先とり入てまつり　音高

十、、 山の端へ向ふ寒さのも高く雪のきえざる雪の信濃路　物種

十、、 とけやらぬこゝろも奴雪女郎さて寒さハかくしやる　置安

十、、 いそ張る釈も夜の海の寒の戸を明る比む川の朝の初雪　泉花

十、、 紅粉粧ひし杵ふる娘と見ゆる衣手に積る初雪　真長

十、、 ふる雪に添ふ松ハ寒けれど煙りハ年賀の酒の酒宴　豆子

十、、 朝とくし松の梢も枝形く雪を手に埋む庭のしら雪　水住

十、、 霞ねど松ハうつくしき春雪のさまハいつくしく初霞　万都子

十、、 起出てまづ手桶の一節に雪の松坂の名をつけにけり　鷺丸

十、、 冬籠る湯ハ奴の初湯の日ハ冬なれど雪も家居の独ハ門口　上総岩和田 登度女

源氏八ノ十五

十、、 山の端のゆきに衣たる木々の枝をさらに春雪の勢力なりけり　下総八日市 押照

十、、 極ひとふ雪も山寺の初雁そまつり一入初めなりけり　相磯辺 年久

、、十二 あけぬさえ氷をさす日に足跡をつけしと雪の濡衣　雄丸

、、十三 雪の夜の寝覚の酒に初雪の朝をのせてあり遊さ　酒徳

、、十二 雪とうたふ人の隠家の世の中かりそめも青柳の枝　福養

、、十二 山寺の時も分てる二つの朝もやの池の数くずれ　夜宴

、、十二 袖ひたし垣の雪の花世話をあつくつむ紅梅　総丸

、、十二 時雨ても雪の流れ松が枝のいつで埋りもしる初　竹女

、、十二 ふる雪の夜しきに向ふ雪の朝しもよし野の雪の松　うた子

、、十二 つもりやとけの夜をん紅梅ひやく雪の庭の初雪　縫女

、、十二 地見ふる雪も雪の日ハ世よふむやい人のまれ　有人

十二 風流なる人のたもとに[illegible]絵つくる花の墨に[illegible] 丸女

十二 いくとせか[illegible]初音に七十七日生延んとく〳〵 春子

十二 あり經むさへ[illegible]の若竹なる庭乃初音 雪丸

十二 結人のこゝろ[illegible]花とこゆるちよつ音 就彦

十二 此花なく飛もなく果ハ白妙のそらとなりくる雪にむさしの 川南

十二 階の下の橘の[illegible]錦繡ハ[illegible]雪の白妙 守仲

十二 孫[illegible]嬉しさに[illegible]飛ぶ[illegible]紺にとまりし初音 長房

十二 [illegible]のこゝせし庭の雪をうけ[illegible]鶯 為成

十二 木蔭ハなけれどのべに初音も[illegible] 清住

十二 色とりもいま[illegible]花見ちる 萍

十二 [illegible]此浦に千代を守り神や[illegible]の姫松 綱子

十二 山と積[illegible]日かけに[illegible]雪のみつ[illegible] 枝成

十二 [illegible]女[illegible]大原乃里 和多守

十二 若菜よ摘月松と[illegible]雪又一むれ 大枝

十二 [illegible]鳥[illegible]姿の松 満留喜

十二 人さへのぞく[illegible]里と年[illegible]雪を[illegible] 徳安利

十二 [illegible]雪を[illegible] 年益改 等夢

十二 [illegible]乃いか[illegible] 久子

十二 [illegible]酒樽に雪見[illegible] 蔵通

十二 [illegible]梅が枝[illegible]の初音 菴住

十二 [illegible]の[illegible] 鷺丸

十二 [illegible]雪の白妙 蝠麿

十一 [illegible] 菴女

十一 [illegible] うや子

十二 [illegible] 孫彦

十二 [illegible] 真春

十二 [illegible] 岩和田 登度女

十三 [illegible] 下総八日市 押照

[illegible] 物藻

[illegible] 島人

[illegible] 真顔

仝當坐 冬 鳥

燕栗園大人撰

十五点 [illegible] 島人君

[illegible] 楽雅

十三 [illegible] 大門

[illegible] かるの子

[illegible] 雄頼

[illegible] 千頼

俳諧歌源氏小鑑八之巻終

[illegible]